

IIAS塾ジュニアセミナーテキスト
(VOL.02034)

「新しい文明」の萌芽を探る
ー日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどるー

(思想・文学分野)

ベルクソンに学ぶー「直観」の哲学
～世界の平和と人類の幸福のために～

公益財団法人国際高等研究所
IIAS塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2019 年 8 月 20 日開催の第 74 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。

※本テキストは、2025 年春季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

「新しい文明」の萌芽を探る

ー日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどるー

人類に託した希望の書 『道徳と宗教の二源泉』を著した 大哲学者「ベルクソン」

アンリ・ベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）はフランス・スピリチュアリズムの哲学者で、科学の実証性を重んじながら、経験に即して自然と精神との根拠を問う生命の形而上学を提唱した。哲学者として国際連盟の知的協力委員会の議長を務めるなど、思索の人として行動し、行動の人として思索する理論家にして実践者であった。「エラン・ヴィタール（生命の躍動）」の起源を求めて「愛」としての「神」へと導かれる最後の主著『道徳と宗教の二源泉』（1932）は、未曾有の危機に立つ現在の人類に託された希望の書である。二十世紀に始動した世界戦場化がテロリズムによって拡大され、迫り来る全面核戦争の危機を杞憂とばかり楽観できない今日、闘争本能を人間の本性と認めて、戦争は殆ど不可避と考えるベルクソンが、それにもかかわらず、人類の未来に絶望することなく世界平和への希望を語りうるのはいかにしてか。その哲学的遺言とも言うべきメッセージに耳を傾けてみよう。

瀧 一郎（Ichiro TAKI）

1959年東京生まれ。開成中学・高校卒業。東京大学大学院人文科学研究科美学芸術学博士課程修了。1995～1997年フランス政府給費留学生としてパリ第I大学（哲学科哲学史博士課程）に留学。大阪教育大学名誉教授。文学博士（東京大学）、DEA（パリ第I大学）。専門は、美学、思想史。（公財）天門美術館理事、（特非）文語の苑理事。主要著作に、『ベルクソン美学研究ー「直観」の概念に即してー』東京大学大学院人文社会系研究科 博士論文ライブラリー、コンテンツワークス、2002年、「想像と類比ーベルクソンの直観の論理」『美学』224, 2006年など。



目次

はじめに

序論 — 日本におけるベルクソン

- ア 西田幾多郎 (1870～1945)
- イ 夏目漱石 (1867～1916)
- ウ 九鬼周造 (1888～1941)
- エ 日夏耿之介 (1890～1971)
- オ 小林秀雄 (1902～1983)
- カ 坂田徳男 (1898～1984)

本論

I 持続の直観

- (1) 「持続」の発見と、その方法としての「直観」
- (2) ベルクソンの「直観」の形而上学的構造
 - ア 「直観」の領域と射程
 - イ 認識方法としての「直観」と「分析」、その優劣
- (3) ベルクソンの「直観」と同類の考え
 - ア 鈴木大拙の「靈性」
 - イ ゲーテの「総合」もしくは「直観」
 - ウ パスカルの「繊細の精神」
- (4) ベルクソンの「直観」の源泉
 - ア 「プロティノスの直観」と「スピノザの直観」
 - イ 「認識」即「創造」の例

II 自由・精神・創造

- (1) 自由について — 『意識の直接与件論』(1889)
- (2) 精神について — 『物質と記憶』(1896)
- (3) 創造について — 『創造的進化』(1907)

III 愛としての神

- 人類に遺されたベルクソン希望の書『道徳と宗教の二源泉』(1932)
- (1) 第一章 道徳的責務 (L'obligation morale)
 - 道徳の二源泉、「愛の飛躍」と「社会的圧力」
- (2) 第二章 静的宗教 (La religion statique)
 - 宗教の二源泉 (その1): 知性がもたらす危険への防御反応

(3) 第三章 動的宗教 (La religion dynamique)

— 宗教の二源泉 (その2) : 「神秘主義」

ア 「静的宗教」と「動的宗教」の比較

イ 動的宗教 (愛の飛躍) の具体例

(4) 第四章 結び

— 機械学と神秘学 (Remarques finales. Mécanique et mystique)

ア 物質 (機械学) と精神 (神秘学) との相互作用

イ デモクラシー : 〈自由〉〈平等〉〈博愛〉

ウ 『道徳と宗教の二源泉』が教示するもの

— 〈我々は何処から来たのか？我々は何者か？我々は何処へ行くのか？〉

(5) 想話的機能と創造的情動が生み出すもの — 宗教、芸術

結論 — 世界の平和と人類の幸福 (快樂ならぬ歓喜を)

ア よく生きる、シンプルに生きる

イ 神と人との間にいる英雄、聖者

ウ 人間の再定義 — 「シンギュラリティー」を考える

質疑応答

次代を拓く君たちへ — 瀧一郎からのメッセージ —

「今を生きよ」。

そして、人間として、人類として「善く」、「美しく」生きることを問え

「※」を付与した写真や絵画の出典は、Public domain, via Wikimedia Commons

2019（令和元）年 8 月 20 日開催

第 74 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：人類に託した希望の書『道徳と宗教の二源泉』を著した大哲学者「ベルクソン」

講演者：瀧 一郎（大阪教育大学教育学部教授）

はじめに

私自身、大学院に入ってから 35 年間、ベルクソンに学んできたので、皆様とベルクソンの最後の主著である『道徳と宗教の二源泉』を中心にお話しできることを喜んでいる。

ただ、哲学を学んでいない人はベルクソンの名前すら知らないかもしれない。まず「日本におけるベルクソン」を紹介し、続いて 1 番目にベルクソン哲学の最も中心になるキーワード中のキーワードである「持続の直観」について、2 番目に「自由・精神・創造」について述べたい。「自由・精神・創造」に関しては全部で四つの主著があるが、第一の主著が「自由」、第二の主著が「精神」、第三の主著が「創造」を主題とするので、最初の三つの書物について述べたい。そして、3 番目として「愛としての神」に導かれる第四の主著『道徳と宗教の二源泉』を紹介し、結論として「世界の平和と人類の幸福」へと話を進めていく。

アンリ・ベルクソン（1859 年～1941 年）は、フランスの哲学者で、20 世紀初頭に活躍した重要な思想家の一人である。ベルクソンの思想は、哲学だけでなく、文学や芸術にも大きな影響を与えた。明快かつ美しい文章で書かれているため散文としての評価も高く、1927 年にノーベル文学賞を受賞している。また、第一次大戦後に、国際連盟の諮問機関として設立された国際知的協力委員会（ユネスコの源流）委員に任命され、第一回会合では議長として明晰かつ無駄のない言辞で手腕を振るう。1930 年にフランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を授与されている。



アンリ・ベルクソン ※

序論 ― 日本におけるベルクソン

ア 西田幾多郎



西田幾多郎 ※

ベルクソンと日本との関係を語る上でまず出てくるのは、日本が世界に誇る哲学者の西田幾多郎である。西田はベルクソンに一度も会ったことはないが、日本ではベルクソンがほとんど知られていなかった時期からその著作に触れ、1910（明治 43）年に「ベルグソンの哲学的方法論」を『芸文』という雑誌に書いて、初めてベルクソン哲学を本格的に紹介した。

西田幾多郎の話はいろいろと聞かれていると思うが、西田は一度も外遊したことがない。それで、弟子に「もしヨーロッパに行ったら、会いたい哲学者は誰か」と聞かれた西田は「会いたいのはベルグソンくらいなものだ」と答えている。その訃報に接したとき、ベルクソンは「十九世紀の終わりと二十世紀のはじめにかけての最も偉大な哲学者」であり、「フランス哲学の伝統はベルグソンによって大成された」と説明している。

西田の親友で、「哲学」の西田幾多郎に対して「宗教」の鈴木大拙¹と言われた大拙も、ベルクソンから深く学んだ人である。大拙の「日本的靈性」はベルクソンの「直観」に通じている。

1870 年～1945 年。京都学派の創始者。京都大学名誉教授。著書に『善の研究』（1911 年）、『哲学の根本問題』（1933 年）などがある。参禅と深い思索の結実である『善の研究』で「西田哲学」を確立し、「純粹経験」による「真実在」の探究は、西洋の哲学者にも大きな影響を与え、高く評価されている。

イ 夏目漱石



夏目漱石 ※

夏目漱石は、帝大の図書館でベルクソンの第一主著『意識の直接与件論』の英訳 *Time and Free Will* を読み、自分が読んだ書物の扉に「文学書ノ面白イモノヲ読ンデ美シイ感ジノスルノハ珍シクナイガ哲理科学ノ書ヲ読ンデ美クシイト思フノハ殆ンドナイ。此書ハ此殆ンドナイモノノウチノーツデアル。第二篇ノ時間空間論ヲ読ンダ時余ハ真ニ美クシイ論文ダト思ツタ。」と書いて、ベルクソンの文体の美しさを讃えている。

また、その弟子筋にあたる芥川龍之介も同じように英訳で読んで、

¹ 鈴木大拙：1870 年～1966 年。仏教学者、文学博士。禅についての著作を英語で著し、日本の禅文化を海外に紹介した。著書約 100 冊の内 23 冊が、英文で書かれている。1949 年に文化勲章、日本学士院会員。

「哲学の本でこんな美しい本は読んだ事がない。綺麗な水を一層ずつ深く沈んで行くやうな気がして、さうしていくら沈んで行っても明るさはちつとも変はらない気がした。」と褒めている。

1867 年-1916 年。日本の小説家、英文学者。明治末期から大正初期にかけて活躍し、今日に通用する言文一致の現代書き言葉を作った近代日本文学の文豪のうちの一人。代表作は、『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『三四郎』『それから』『こゝろ』『明暗』など。

ウ 九鬼周造



九鬼周造 ※

『「いき」の構造』で有名な九鬼周造は、日本人が英米の功利主義よりもドイツのカント、フランスのベルクソンを好む理由について、「日本におけるベルクソン」(“Bergson au Japon”)というフランス語の小論の中で書いている。

それによると、一方に武士道がある。すなわち、武士道の理想主義的道德があるので、カント哲学が好まれる。他方に禅がある。すなわち、禅の瞑想にベルクソンの直観が似ているので、ベルクソン哲学が好まれる、というのである。

1888 年-1941 年。哲学者。京都帝国大学教授。実存哲学の新展開を試み、日本固有の精神構造あるいは美意識を分析した。著書は、日本文化を分析した『「いき」の構造』(1930 年)、『偶然性の問題』(1935 年) など。

エ 日夏耿之介



日夏耿之介 ※

4 人目は日夏耿之介だが、彼はいわゆる学匠詩人であり、珍しくベルクソンの神秘主義者としての面目を早くから評価している人であった。日夏によると、「祖父もまた天保 8 (1838) 年生れの頼老でありながら、ベルグソンの哲学やゾラの小説の和訳をも嗜み読んで、ヘルグソン(と発音してみた)などの思想は、日本には昔からあつてちつとも新しくはない。が西洋人(サイヨウジンと発音して)がこんな思想を有つのは感心だ。」と評して聞かせたそうである。「ベルクソン流の哲学は東洋哲学では陳腐に属する」とも言われたそうである。

また、九鬼周造もインドの詩人タゴール²に「ベルクソン哲学をど

² タゴール : 1861 年～1941 年。インドの詩人、思想家、作曲家。詩聖として非常な尊敬を集めている。1913 年には『ギタンジャリ (英語版)』によってノーベル文学賞を受賞した。これはアジア人に与えられ

う思ふか」と聞き、タゴールは「印度では往古からこの哲学を有つてゐる」と答えたと言われている。

1890 年-1971 年。詩人・英文学者。号は夏黄眠、黄眠道人、黄眠堂主人、聴雪廬主人、石上好古、溝五位など 30 数種類存在する。広範な学識と多岐にわたる文学活動で「学匠詩人」と称される。

オ 小林秀雄



小林秀雄 ※

小林秀雄は、日本において批評というものを確立した人物だが、その小林の方法はベルクソン哲学の方法に他ならない。本人はベルクソン哲学については「感想」という題で雑誌『新潮』に長い連載をしていたが、最後まで完成できずに終わった。しかし小林は、「内省によって経験されている精神の持続と類似した一種の持続が、物質にもあるというベルクソンの考えは、理解しがたい異様なものと思われたが、今日の物理学が到達した場所から、これを省みるなら、大変興味のある考えになる」と述べて、「持続」という観点から、

アインシュタインの相対性理論やハイゼンベルク³の量子力学を理解しようとしたのである。

1902 年～1983 年。文芸評論家、編集者、作家、美術・古美術収集鑑定家。日本芸術院会員、文化功勞者、文化勲章受章者。日本の文芸評論の確立者であり、晩年は保守文化人の代表者であった。

カ 坂田徳男

6 人目は坂田徳男だが、彼は哲学者なので多くの方は知らないかもしれない。坂田はカントもベルクソンもしっかりと理解した上で評価し、すぐれた翻訳を残しているが、1966（昭和 41）年に雑誌『理想』がベルクソン特集を編んだときに、ベルクソン哲学の再評価を頼まれる。それに対して坂田は、「ベルクソンがかつて我が国で評価などされたことがあったのか」と反論し、日本の研究者たちは本当にベルクソンを理解して、真面目に取り組んできたのか、と批判している。このようにして「現代はベルグソンの *durée*（持続）を破壊しつ

た初のノーベル賞でもあった。インド国歌の作詞・作曲、およびバングラデシュ国歌の作詞者で、タゴール国際大学の設立者でもある。

³ ハイゼンベルク：1901 年～1976 年。ドイツの理論物理学者。1925 年に行列力学（マトリックス力学）を、1927 年に不確定性原理を導いて、量子力学の確立に大きく寄与した。1932 年に 31 歳の若さでノーベル物理学賞を受賞。

くした」と喝破する坂田は、「大衆化」(オルテガ⁴) し、さらに「アトム化⁵」(ピカート⁶) した現代に警鐘を鳴らすのである。

1898 年～1984 年。哲学研究者。大阪市立大学名誉教授。主著に『カント純粹理性批判解釈』『ベルグソン研究』(編)『人間崩壊さなかの哲学』など。

本論

I 持続の直観

(1)「持続」の発見と、その方法としての「直観」

ベルクソン哲学の中心概念は「持続の直観」である。ベルクソンはデンマークの哲学者であるハラルド・ヘフディング⁷に宛てた手紙の中で「私の意見では、私の意見の概説が自分で学説の中心そのものと考えているもの、つまり持続の直観(*l'intuition de la durée*)に初めから立脚するのでないならば、また絶えずそこへ帰っていくのでないならば、そのような概説はどれも私の見解を全体として歪め、まさにそのことによって多くの反論に晒すことになるでしょう。相互浸透(*pénétration mutuelle*)の多様性の表象、これは数の多数性とは全く異なった、異質的・性質的・創造的な表象なのですけれども、それこそが私が出発した点であり、また絶えずそこへ帰っていった点であります。」とはっきり書いている。つまり、ベルクソンは、「持続の直観」を自分の哲学の中心、すなわち出発点にして帰着点である、と説明している。

実際に、ベルクソンは二つの時間を区別している。普通、人は「同質性を特色とする流れた時間」(空間化された時間)を「時間」と思っているが、これは空虚な時間(虚構的時間)であって、真の時間(リアルな時間・実在的時間)ではない。本当の時間は「異質性を特色とする流れる時間」であり、生きられた時間である。これをベルクソンは「持続」と言っている。

「アキレウスは亀に追いつけない」というゼノンの逆説⁸がある。スタートした時に亀が

⁴ オルテガ：1883 年～1955 年。スペインの哲学者。主著に『ドン・キホーテをめぐる思索』『大衆の反逆』がある。

⁵ アトム化：巨大化した機能集団の官僚制機構のなかで、人間が一つの歯車と化して主体性を喪失し、孤立した状態にあることをいう。現代社会において、各個人がおかれている状況を表現する言葉としてよく使われている。

⁶ ピカート：1888 年～1963 年。スイスの医師、思想家。著書には、『沈黙の世界』『騒音とアトム化の世界』などがある。

⁷ ハラルド・ヘフディング：1843 年～1931 年。コペンハーゲン大学教授。カント、ショーペンハウアー、イギリスの道徳哲学の影響を受けた。批判的実証主義の立場に立ち、形而上学、直観主義に反対した。

⁸ ゼノンの逆説：古代ギリシャの自然哲学者であるエレア学派のゼノンが、自分の学派の説を守るために提示した逆説。運動を否定するための「アキレスと亀」の他、「飛んでいる矢は止まっている」などが有名。

アキレウスよりも少し先に進んでいたとして、アキレウスが亀のいた所にたどり着くと、その間に亀はさらに少し前に出ている。それで、またアキレウスが亀のいた所まで行くと、その間にまた亀は僅かに前に出る。したがって、いくら亀に近づこうとしてもアキレウスは永久に亀に追いつけない、という逆説である。これはまさに〈時間における運動の進行〉を〈空間における運動の軌跡〉と読み替えて「流れる時間」を「流れた時間」として空間化するとところからくる逆説である。

「持続」を発見したときにアンリ・ベルクソンは哲学者ベルクソンになる。はじめに「持続」の理論が成立した。次に、持続を発見する方法としての「直観」の理論が成立するのは、1903年の論文「形而上学序説」から1907年の第三主著『創造的進化』に至るまでの間である。

（２）ベルクソンの「直観」の形而上学的構造

ア 「直観」の領域と射程

「持続」を捉える方法としての「直観」が、ベルクソン哲学の中では大切である。「直観」が働く領域は、芸術・科学・哲学・道徳・宗教であり、これらの諸領域に共通の基盤が「直観」である。これらの諸領域は「直観」において再び一緒になる。

「哲学的直観は芸術的直観と同じ方向に入り込んだ後で、ずっと遠くまで行く」と言われ、さらに「科学に支えられた直観が延長されうるとすれば、それは神秘的直観によつてのみ可能である」と言われるように、「直観」の射程（有効範囲）は、ベルクソン哲学の進展とともに、徐々に延長・強化されてきた。「直観」は地上から天に向かって少しずつ上昇していく。まず芸術における「美学的直観」が〈生命のイメージ〉を捉え、ついで哲学における「形而上学的直観」が〈生命そのもの〉を捉え、さらに宗教における「神秘的直観」が〈愛としての神〉を捉えるというように、「直観」のベクトルは鉛直上向きにその射程を伸ばしていくのである。

イ 認識方法としての「直観」と「分析」、その優劣

「直観」とはどのような働きなのか。「分析」と比較して考えてみよう。ベルクソンは「直観」と「分析」を定義して、「絶対は直観(l'intuition)のなかにしか与えられないが、他のすべては分析(l'analyse)の領分に属する。私がここで直観と呼ぶものは共感であり、その共感によって我々は対象の内部に自らを移し入れ、その対象の持っているユニークな、したがって表現できないところと一致する。反対に、分析は、対象を既知の諸要素に、すなわちこの対象と他の諸対象とに共通な諸要素に、還元する操作である。」と言っている。

「分析」が、〈対象を考察する観点〉及び〈対象を翻訳する記号〉という二点において相対的な、外側からの認識をもたらす作用であるのに対して、「直観」は、主客の合一した絶対的な、内側からの認識をもたらす作用である。言い換えれば、「分析」が、一つの対象をぐるぐる周回しながら、それを多くの要素に分解したうえで、〈多〉から〈一〉を空しく再

構成しようとする操作であるのに対して、「直観」は、「共感」によって一つの対象のなかに直入し、知るものと知られるものとが合致した状態で、一挙に〈一〉を把握する「単純な行為」である、と考えられている。

このように、認識作用として「直観」と「分析」とが対比されるが、認識能力としては「直観」と「知性」とが対比される。哲学においては「直観」が「直観」することによって絶対的な認識が与えられるのに対して、科学においては「知性」が「分析」することによって相対的な認識が与えられる、とすることができる。

このことをジェットコースターの例で考えてみよう。ジェットコースターを外側から見る場合、側面（横）から見るのか正面（前）からを見るのか、またいかに記録するのか、その観点と記号の違いに応じて相対的な認識がもたらされる。それに対して、ジェットコースターを内側から見る場合、つまり自らジェットコースターに乗り込んで、ジェットコースターもろとも昇降運動を体験する場合には、ジェットコースターのことを自分のことのように直接に知ることができるので、絶対的な認識がもたらされる。前者が「分析」による相対的な認識であり、後者が「直観」による絶対的な認識である。

両方とも同じように大切な認識の仕方ではあるが、優劣がある。「直観から分析には移れるけれども、分析から直観には移れない」とベルクソンは言うのである。これはどういうことかという、たとえば「丸くて三角なものは何か」というなぞなぞを考えてみてほしい。すぐに「円錐」と答えられた人は、「円錐」を「直観」できた人である。その人は、円錐が「横から見れば三角で、上から見れば丸」である、と「分析」することができる。しかし、「丸と三角」という「分析」の結果だけを二次元の平面上で組み合わせようとする人は、三次元の「円錐」という「直観」には辿り着けない。すなわち「円錐」の「直観」からは「円と三角形」という「分析」に移行できても、「円と三角形」という「分析」からは「円錐」の「直観」に飛躍できない。つまり全体の「直観」から諸要素の「分析」には降りられても、諸要素の「分析」から全体の「直観」へは昇れない、ということである。この不可逆性が「直観」の優位を示している。

（３）ベルクソンの「直観」と同類の考え

ア 鈴木大拙の「靈性」

この考え方は、西田幾多郎の友であった鈴木大拙が『日本的靈性』⁹として書いており、それがベルクソンの言う「直観」に当たっている。大拙は「知性からは靈性は出ないけれども、靈性からは知性が出る」と言っているが、これは「分析から直観には行けないけれども、直観からは分析には行ける」というベルクソンの言葉と軌を一にしている。おそらく大拙はベルクソンを読んで、「知性」以上の「日本的靈性」という考えに至ったものと思われる。

⁹ 『日本的靈性』：1944(昭和19)年、鈴木大拙は軍部が宣揚する日本精神に対抗して日本的靈性を唱え、本書を著した。大拙は精神の根底には靈性（宗教意識）があると主張。鎌倉時代の浄土系宗教と禅宗を重視した。念仏や禅の本質を生活と結びつけ、わかりやすい言葉で読み解き、日本人が持つべき心の支柱を熱く語る代表作。

イ ゲーテの「総合」もしくは「直観」

ゲーテの『形態学序説』¹⁰には、次のように書かれている。「生命ある存在を分解してゆけば、たしかに諸要素に到達はできる。だが、この諸要素を集めてみたところで、もとの生命ある存在を再構成したり、生の息吹を与えることはできないのである。このことは、有機体はもちろん、多くの無機物についてもあてはまる。だからこそ学者たちもまた、いつの時代にあっても抑えがたい衝動を感じてきたのである。それは、生命ある形成物そのものをあるがままに認識し、眼にみえ手で触れられるその外なる部分部分を不可分のまとまりとして把握し、この外なる諸部分を内なるものの暗示として受けとめ、こうしてその全体を幾分なりと「直観」において我がものとしよう、という衝動である。」ゲーテもまた、誤った「総合」としての「仮説」ではなく、真の「総合」としての「直観」による、内側からの絶対的な認識について述べている。

ウ パスカルの「繊細の精神」

パスカル¹¹は『パンセ』の中で「繊細の精神」と「幾何学の精神」という二つの精神を区別しているが、「幾何学の精神」が分析的でロジカルな精神の働かせ方であるのに対して、「繊細の精神」はまさにベルクソンの「直観」の精神である。パスカルにおける「幾何学の精神」と「繊細の精神」との関係は、ベルクソンにおける「知性」と「直観」との関係に等しい。パスカルは「問題のものを、すくなくともある程度までは、推理の運びによってではなく、一遍で一目で見なければならぬのである」と言っているが、これも直ちに一なる全体を掴むというベルクソンの「直観」と同類の考え方であろう。

(4) ベルクソンの「直観」の源泉

ア 「プロティノスの直観」と「スピノザの直観」

ベルクソンは、「プロティノス¹²の直観」と「スピノザ¹³の直観」とを区別している。ベルク

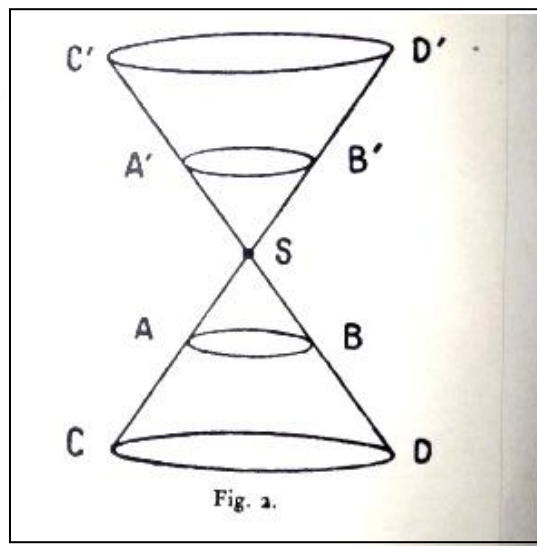
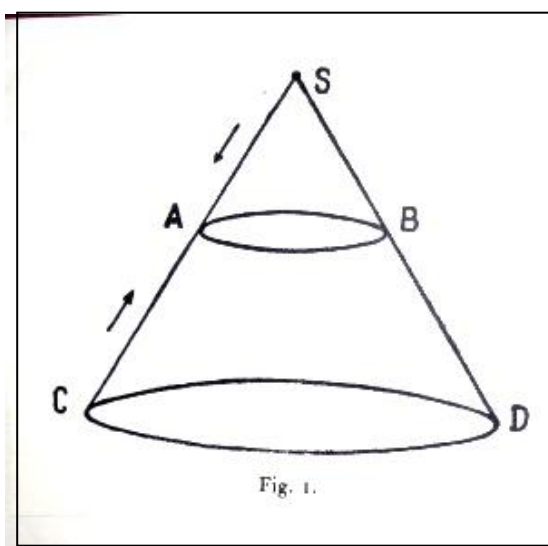
¹⁰ ゲーテ：1749年～1832年。文学者・哲学者として名高いが、同時に多くの自然現象を研究した博物学者でもあり、1807年に『形態学序説』を著した。

¹¹ パスカル：1623年～1662年。フランスの数学者、物理学者、宗教思想家。16歳で『円錐曲線論』を著し、「パスカルの原理」を明らかにした。神学者として、理性に対する心情の論理から信仰を弁護。人間は無と無限、無価値と高貴、卑小と偉大のような矛盾的側面をもつが、そのような二面性を知らせるのがキリスト教であるとした。その透徹した人間分析と宗教思想は、現代実存主義をはじめ、フランスの文芸・思想に大きな影響を与えた。遺稿となった『パンセ』にある「人間は考える葦である」という言葉も有名。

¹² プロティノス：205年頃～270年頃。エジプトに生まれた古代ローマの哲学者。新プラトン学派の創始者。世界は完全なる神の発現・流出であり、それがイデア界・感覚界へと下って事物を生み出すと主張し、中世スコラ学に深い影響を与えた。

¹³ スピノザ：1632年～1677年。オランダの哲学者。ユダヤ神学を学んだが、これを批判してデカルトの合理主義に立ち、物心平行論を唱え、個々の事物を実体である神のさまざまな様相と見て、神への知的愛により神の自己自身への愛と合一する汎神論を唱えた。スピノザの汎神論は新プラトン主義的な一元論でもあり、後世の無神論や唯物論に強い影響を与え、または思想的準備の役割を果たした。著書は『エチカ（倫理学）』『神学政治論』『知性改善論』『国家論』など。

ソンの「直観」のモデルとされたスピノザ的な「直観」について、ベルクソンは、それを著書『思想と動くもの』(1934年)の中で、「<われわれの精神が真理を完全に認識する行為>と<神が真理を産出する働き>とが一致する感情、アレクサンドレイア学派〔プロティノスのこと〕の「還帰 conversion」が完全になるとときには「発出 procession」と一つでしかなく、神性から出た人間が神性に帰りおおせるときには、はじめ往くと帰るという二つの相反する運動を見ていたところに、もはや一つの運動しか認めない — 論理的な矛盾を解消し、時間(Temps)を突然消し去ることにより、帰りが往きであるようにすることを引き受ける道徳的な経験がここにある — という観念」と説明している。



このテキストは難解であるが、その意味をベルクソン自身がある講義で次のように説明している。左の円錐 (Fig. 1) はプロティノスの場合で、発出の後で還帰する、静態的な認識が問題となる。すなわち、神 S から発出 ($S \rightarrow B \rightarrow D$) したソクラテス D は、物質から目を背けて神の方に向き直り、還帰 ($D \rightarrow B$) して B において、自らの本質のうちに帰って神と同じ永遠性をもつことができ、さらに歩み続けて ($B \rightarrow S$)、恍惚によって神 S と合致することができる。

これに対して、右の二重円錐 (Fig. 2) はスピノザの場合で、還帰が即ち発出で、認識が即ち創造となる力動的な構造を持つ。すなわち、神 S から発出 ($S \rightarrow B \rightarrow D$) したソクラテス D は、逆方向の道 ($D \rightarrow B \rightarrow S$) を歩んで、神 S に還帰して創造をやり直す必要はない。むしろ発出と同じ道を歩き抜いて創造することが問題である。そこで還帰 ($D' \rightarrow B' \rightarrow S$) は発出 ($S \rightarrow A \rightarrow C$) に他ならない。

ただし、ベルクソンは「神から出発して事物に行く」ようなスピノザの方法には同ぜず、「私は、神が与えられたものであるかのように、神から出発することは決してない」と述べ

ている。プロティノスの場合、〈一〉から〈多〉へと発出し、それから〈一〉へと還帰するのに対して、ベルクソンの場合、〈多〉から〈一〉に還帰することが、そのまま〈多〉へと発出することになる。そして、「還帰」が即ち「発出」であるような一方向即双方向的因果性に基づく産出が、ベルクソンの言う「創造」である。

ベルクソンがプロティノスの「直観」に認めた「発出」及び「還帰」構造は、大乘仏教での回向¹⁴の「往相¹⁵」及び「還相¹⁶」構造と似ている。ただし、一者からの「発出」と一者への「還帰」という往復運動は、浄土への「往相」と浄土からの「還相」という往復運動と、行き帰りの方向が逆になっていることに注意が必要である。「廻向 (parinama) に二種の相有り。一には往相、二には還相なり。往相とは己が功德を以て一切の衆生に廻施して、共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せんと作願するなり。還相とは彼の土に生じ已 (をはり) て、奢摩他¹⁷毗婆舍那¹⁸を得て、方便力成就しぬれば、生死の稠林^{ちゅうりん}に廻入し、一切の衆生を教化して共に佛道に向ふ。」(曇鸞¹⁹『往生論註下』21下・22上) 大乘仏教での行きは浄土への「往相」で、帰りが浄土からの「還相」であるのに対して、プロティノスにおける行きは一者からの「発出」で、帰りが一者への「還帰」である。

イスラム神秘主義 (スーフィズム) にも同様の考えが見出せる。井筒俊彦²⁰によれば、「仏教に往相と還相、還源と起動、向上と向下という考えがある。これは仏教における意識の段階と実在の段階とを規定する重要なパターンであるが、これと構造的には全く同じような考え方がスーフィズムにもある。」向上 (スウード) の道を登りきると、「有から無に」いたり、この主客のゼロ・ポイントにおいて「無から有に」転換して、向下 (ヌズール) の道を降りることになる、というのが「向上」及び「向下」構造である。

他方、ベルクソンがスピノザの直観に認めた「発出」即「還帰」構造は、禅仏教の悟りの境地と似ている。鈴木大拙は『禅と日本文化』のなかで禅体験について、次のように言っている。「知的作用という外側のものに向かわずに、心がその注意を内部に向ける時、一切は空から出て、空に帰することを知覚するのである。而してここに往還といえは往くと還との二つの方向があるかのごとく考えなければならぬが、その実はただ一つの動きであることを知ってほしい。この動態的同一作用 (ダイナミック・アイデンチフィケーション) ともいべきものは、われわれの体験の基礎であって、一切の生活活動はその上に展示されるの

¹⁴ 回向：仏教用語。自己が仏道を修めた善い行為や功德を、すべての人々の悟りのために振り向けること。

¹⁵ 往相：仏教用語。浄土に往生すること。その往生するまでの姿。

¹⁶ 還相：仏教用語。極楽に往生した者が、再び現世に還ってきて、一切の衆生を教化して共に仏道に向かわせること。

¹⁷ 奢摩他 (しゃまた)：仏教用語。ひとつの対象に心を落ち着かせることを意味する。

¹⁸ 毗婆舍那 (びばしゃな)：サンスクリット語の「ヴァイローチャナ」(Vairocana) の音訳で「光明遍照」を意味する。

¹⁹ 曇鸞：476年～542年 (不詳)。中国南北朝時代の僧。中国浄土教の開祖とされ、浄土宗では「浄土五祖」の第一祖とされる。

²⁰ 井筒俊彦：1914年～1993年。日本の言語学者、イスラム学者、東洋思想研究者、神秘主義哲学者。慶應義塾大学名誉教授。文学博士、エラノス会議メンバー。日本学士院会員。

である。」大拙の「往相」即「還相」構造は、スピノザの「発出」即「還帰」構造に等しい。

イ「認識」即「創造」の例

① 日本の詩歌—松尾芭蕉の俳句など

例えば、服部土芳²¹が『三冊子』のなかで、師の芭蕉による作句の秘訣を明かしている。

『松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ。』と師の言葉のありしも、私意を離れよといふことなり。この習へといふところを己がままにとりて、つひに習はざるなり。」「習へといふは、物に入りて、その微のあらはれて情感ずるや、句となるところなり。」ここで「習ふ」というのは、対象をよく知るという認識であり、その認識が完全になると、そこから無我のうちに松のことが松として詠み出され、竹のことが竹として詠み出されるという制作、つまり認識が即ち制作となる体験について語られている。

このことは作句のみならず作画についても言える。『中国の神秘主義と近代絵画』の著者ジョージ・ダスイット曰く、「十年間、竹を描け、そして自身が一本の竹となって竹を描け、このようにして描く時、竹に関する一切を忘却せよと。間違いなき技術はすでに手にはいつているので、いまはただ天来の興に身を任せるのだ。」これに対して鈴木大拙は、「自分が竹になること、竹を描くとき竹と同一化したことさえ忘れること、これは竹の禅ではなかろうか。これは画家自身のなかにもあれば竹のなかにもあるところの「魂の律動的な動き」とともに動くことである。『一即一切、一切即一』これが十二分に理解されたとき創造の天才が生れる。」ここにも主客同一による「認識」即「制作」がある。

② 肖像画の制作—「モナ・リザ」の肖像など

²¹ 服部 土芳：1657年～1730年。江戸時代前期の俳人。芭蕉晩年の俳論を整理した『三冊子』などの著書を残した。

ベルクソンは「芸術的直観」について次のように言っている。「モナ・リザの肖像か、あるいはさらにルクレツィア・クリヴェッリの肖像の前に足を止めてみよう。その人物像の、



レオナルド・ダ・ヴィンチ作
「モナ・リザ」※



レオナルド・ダ・ヴィンチ作
「ラ・ベル・フェロニエール」
ルクレツィア・クリヴェッリが
モデルと言われている。※

目に見える諸々の線が、キャンバスの背後にある潜在的な一つの中心〔芸術的直観〕に向かって遡り、ここでは謎めいた容貌のなかに一句一句読んでいってはいつまでも読みつくせない秘密が、一挙に、ただの一語に集約されて、発見されるように思われまいだろうか。画家が身を置いていたのはそこである。この点に集中された単純な心的ヴィジョンを展開することによって、画家は自分の目の前にいるモデルを忠実に再発見し、画家なりの仕方方で自然の産出的努力を再生産し

たのである。」鑑賞者が到達する潜在的な一点は、芸術家が出発した潜在的な一点にほかならない。この一点〔芸術的直観〕から始まる画家の制作活動は、自然の産出活動とパラレルな関係にあつて、「認識」即「制作」の典型的な例を提供する。レオナルドはモデルのリザ夫人を観ながら、自然が万物を生み出す努力にならって、リザ夫人の絵を描こうと努力するわけである。

Ⅱ 自由・精神・創造

（１）自由について — 『意識の直接与件論』（1889）

第一の主著『意識の直接与件論』は、「自由の事実」を明らかにするものである。ベルクソンは「自由」を定義して、「具体的な自我とそれが為しとげる行為との関係が自由と呼ばれる。」「我々が自由であるのは、我々の行為が、全人格から発し、全人格を表現し、行為が人格に対して、作品と芸術家の間にしばしば見出されるあの定義しがたい類似をもつ場合である。」と言っている。ベルクソンが、「持続」する主体のあり方を自由と呼び、また主体と行為との関係をも自由と呼ぶのは、自由が芸術家の制作行為を典型とする事実だからである。再び「モナ・リザの肖像」を例に挙げるならば、レオナルドが絵を描くとき、自分が自由な主体として、絵筆をふるいながら自由な制作活動をすることにより、カンヴァスにレオナルドらしい作品を産出していく、ということである。

（２）精神について — 『物質と記憶』（1896）

第二の主著は『物質と記憶』という、難解であるが画期的な書物である。哲学者のハイデガー²²は『物質と記憶』のどのページを開いても目から鱗が落ちる思いだ」とベルクソンを高く評価し、大学の演習のテキストとしてベルクソンの「形而上学入門」を使ったほどである。

この『物質と記憶』は「精神の实在」を証明した。ここでベルクソンは、持続一元論の立場からデカルト以来の物心二元論を乗り越える。「純粹知覚が、物質の本性への情報を与えながら、实在論と観念論との間で態度をとることを可能にするならば、純粹記憶は、精神と呼ばれるものへの展望を開きながら、そちらの側で唯物論²³と唯心論²⁴という他の二学説を判定するはずである。」すなわちベルクソンは、「純粹知覚」の理論によって「物質」に関する〈实在論と観念論と〉の対立を調停し、「純粹記憶」の理論によって「精神」に関する〈唯物論と唯心論と〉の対立を克服しようとするのである。

このような二元論のベルクソンによる乗り越えについて、さらに説明しよう。「持続」のリズムが張りつめて緊張していくと精神になって、意識(Conscience)の領域にいたるが、逆に「持続」のリズムが緩んで弛緩していくと今度は物質になって、科学(Science)の領域にいたる。このように「持続」のリズムが速くなるか遅くなるかによって、精神から物質までの連続的な段階が考えられることになる。「われわれの表象のなかで当面する感覚的性質と、計算可能な変化として処理されるこの同じ性質と、両者の間には「持続」のリズムの差異、内的緊張の差異があるにすぎない。こうしてわれわれは延長の観念により広がるもの(l'étendu)と広がらぬもの(l'inétendu)との対立を取り除いたように、緊張の観念により質と量との対立を取り除こうとした。延長と緊張とは多様ながら常に限定された程度を許容する。」

緊張(Tension)が外へ(Ex)と緩むと延長(Extension)になる。Tension、Extension と韻を踏みながら、外へと緊張を弱めると物質になり、内へと緊張を強めると精神になる。「緊張」は〈性質と分量と〉を、「延長」は〈広がるものと広がらぬものと〉を連続させる概念であった。「実際は、持続の唯一つのリズムがあるのではない。人は異なる多くのリズムを想像することができるし、それらのリズムはより遅いか速いかによって意識の緊張もしくは弛緩の程度を示し、そのことによって諸存在の系列におけるそれら各々の位置を固定するであろう。」要するに、物質と精神との関係は、空間においてスタティック（静的）にではなく、時間においてダイナミック（動的）に捉え直された。過去から未来にのびる、生きられ

²² ハイデgger：1889年～1976年。ドイツの哲学者。フッサールの現象学を継承しつつも、ニーチェのニヒリズム、ディルタイの解釈学、キェルケゴール哲学の影響を受けて実存哲学に到達し、第一次世界大戦後のドイツ思想界に大きな影響を与えた。1933年フライブルク大学総長となったが、ナチスを支持したため、戦後、一時追放された。主著『存在と時間』は20世紀最大の哲学書とされる。

²³ 唯物論：精神の实在を否定して、物質の根源性、独自性のみを主張する哲学の理論、または立場。宇宙の本質は物質であり、物質とは別物の靈魂・精神などは实在せず、意識は高度に組織された物質である脳髓の所産であり、認識は客観的实在である脳髓による反映であるとする説。

²⁴ 唯心論：物質に対する精神の根源性、独自性を主張する哲学の理論、立場。物質の实在を認めず、外界は主観の観念であるとする説。

た「持続」という時間のなかで再考されたのである。

（３）創造について — 『創造的進化』（1907）

第三の主著『創造的進化』は、「創造を事実として示す」ものである。ここでは精神が「できあがる活動としての上昇運動」として、物質性が「こわれる活動としての下降運動」として捉えられる。「一方では《靈性》の底に、他方では知性性を伴う《物質性》の底に、反対方向の二つの過程があり、一方から他方へと移るには転換によればよく、おそらく中断によるだけでもよい。」すなわち精神と物質との関係は、運動の転換もしくは中断によって説明される。「形相を産み出す活動の単なる停止が、その質料を構成しうるとすれば（芸術家の描いた独創的な線は、それ自体すでに一つの運動の固定であり、いわば凝結ではないか）、質料の創造は理解不能でも容認不能でもなかろう。なぜならわれわれは形相の創造を内側から捉え、絶えずそれを生きているし、形相が純粹で、創造の流れが一時中断される場合こそ、質料の創造になるのだから。」

ベルクソンはここでも芸術家を引き合いに出しているので、フィギュアスケートを例に考えてみよう。氷上で優美にフィギュアスケートを踊っているダンサーの運動は、連続的で切れ目がないが、そのような時間における生きた活動が終わると、滑走の軌跡として空間のなかに美しい氷上の円弧が凝固する。優美な運動が美しい軌跡になる瞬間こそ、緊張が中断して延長となり、上昇が下降に転換する臨界点であって、そこではまさに〈直観による形相の創造〉の時間的連続と〈知性による質料の創造〉の空間的非連続が、同時に目撃されている。

Ⅲ 愛としての神

— 人類に遺されたベルクソンの希望の書『道徳と宗教の二源泉』（1932）

（１）第一章 道徳的責務（L'obligation morale）

— 道徳の二源泉、「愛の飛躍」と「社会的圧力」

第一章は「道徳的責務」であるが、ベルクソンが第一章でこの問題を取り上げるのは、道徳において最も大切なのは「責務」であると考えたからである。「優れて道徳的な問題とは、責務（obligation）を説明することである。私の意見では、どの哲学者もそれに成功してはいない。そうであるから、私は道徳的な責務を〔宗教とは〕別にして、まず最初に論じなくてはならないのである。」とベルクソンは書いている。「哲学者たちは責務を説明し、責務を生み出すことができない、というのも哲学者たちは、自ら気づくことなく、責務がまず与えられたものとしているからである。責務はそこにある。そうである以上、哲学者たちは行き当たりばったりの如何なる理由からも道徳を導き出すことができるのである。けれども、哲学者たちの導出はいずれも責務を説明しない。私もまた、実際に責務はそこにある、と言う。けれども私は、〔責務があるのは〕何故に、如何にして〔であるか〕等々を示すのである。」

ベルクソンにとって「責務」は「生物学的に与えられたもの」であって、デュルケーム²⁵のように「社会学的なもの」ではない。したがって、「膜翅類〔蜂・蟻の類〕の社会的本能と人間の社会との間の対応」は、ベルクソンにとって根本的なことであった。

第一章「道徳的責務」は、以上のような問題意識から書き始められる。(1) 有機体と社会との類比(2) 昆虫社会と人間社会との比較という研究方法によって、「道徳の二源泉」が解明される。「第一の道徳」は、〈閉じた社会における社会的本能＝圧力 (pression)〉で、昆虫の社会的本能にも似た「習慣」の形をとり、これによって〈停滞による自己保存の快感 plaisir〉がえられる。「第二の道徳」は、〈開いた社会における完全な道徳＝憧憬 (aspiration)〉で、英雄や聖人の「情動 (émotion)」から生まれ、これによって〈前進による自己創造の歓喜 joie〉がもたらされる。道徳のミニマムを示す「第一の道徳」は、知性以下の「社会的圧力」として〈～しなくてはならない〉という意識をもたらすのに対して、道徳のマキシマムを示す「第二の道徳」は、天才の「呼び声 (appel)」による知性以上の「個人的憧憬」として〈あの方のように私も～したい〉という意識をもたらす。要するに、「第一の道徳」は〈命令の体系〉として、有無を言わさぬ非人格的な強制であるが、「第二の道徳」は〈呼応の総体〉として、自由を容れる人格的な勧誘である。

(2) 第二章 静的宗教 (La religion statique)

— 宗教の二源泉 (その 1) : 知性がもたらす危険への防御反応

第二章は「宗教の二源泉」のうちの一つ「静的な宗教」である。ベルクソンは「なぜ人間には宗教が必要なのか」という問いに対して、次のように説明する。驚くべきことに、知性を有する人間だけがあのおぞましい習慣をもつような宗教を有している。本能しかない動物には宗教はない。なぜ人間には宗教が必要なのか。それは生から離反しようとする知性の傾向による。すなわち、人間が死を免れないことを知った知性は、これから生きていこうとする勇気を挫く。あるいは、利己主義に陥りやすい知性は、社会的凝集をバラバラにして社会を不安定にする。そういう知性的存在としての人間のために、個人や社会が生命を再び取り戻し、生命に執着させるために、静的宗教がある。つまり、知性のもたらす危険(生からの離反)に対する自然の防御的反作用こそ、静的宗教にほかならない。

静的宗教は具体的には「神話」のかたちをとるが、神話を生み出す働きが「想話的機能 (fonction fabulatrice)」と呼ばれるものである。「想話的機能」は英訳では文字どおり“myth-making function”と訳されている)。この働きは、人間においては意識の周辺に残る潜在的な「本能 instinct」と、意識の中心を占める顕在的な「知性 intelligence」と、その両者の補完的協力から生ずる知性以下の機能である。

²⁵ デュルケーム：1858年～1917年。フランスの社会学者。社会学の方法の確立につとめ、それにもとづき当時の西欧社会のさまざまな社会問題を考察し、社会生活の原型を追究して未開地域の宗教の解明にも取り組むなど、多面的な成果をあげた。のちにデュルケーム学派とよばれるようになる社会学者のグループを形成、指導し、フランスにおける社会学の発展に大きく寄与した。

(3) 第三章 動的宗教 (La religion dynamique)

— 宗教の二源泉 (その2) : 「神秘主義」

第三章の「動的宗教」とは「神秘主義」のことを指している。「神秘主義」と言えば、何か訝しいものを想像するかもしれないが、ここでベルクソンが「神秘主義」と呼ぶものは、「理性以上 (supra-rationnel) でありながら合理的 (raisonnable) な体験」のことである。反-知性的でも非-知性的でも没-知性的でもなく、超-知性的なもので、これは古代ギリシア哲学 (プロティノス) や禅仏教 (鈴木大拙) にも見出せるものである。

ア「静的宗教」と「動的宗教」の比較

閉じられた社会における静的宗教 (神話) は、本能と知性との相互補足による「想話的機能」 (fonction fabulatrice) から生じるが、開かれた社会における動的宗教 (神秘主義) は、直観と知性との相互補足による「創造的情動」 (émotion créatrice) から生じる。生からの離反という知性のもたらす危険は、直観の vision 化である知性以下の「想話的機能」によって回避されてきたが、直観の action 化である知性以上の「創造的情動」による別の解決が、自然によってではなく人間的^{いにより}天才^{えんうん}によってもたらされることがあった。人間の意識の中心を占める知性の周囲には、太陽を^{いにより}圍繞する^{えんうん}縁量のように、本能の残滓が取り巻いているが、この残滓をイメージ化して弱めながら安定させる作用 (想話的機能) ではなく、逆に活動化して強めながら変革する作用 (創造的情動) が、動的宗教を出現させたのである。

イ 動的宗教 (愛の飛躍) の具体例

(偉大な神秘家)

ベルクソンはキリスト教の「偉大な神秘家」について、次のように言っている。「偉大な神秘家は、神との合一によって真理がその源泉から働く力として自分のなかに流れ込んでくるのを感じた。太陽がその光を放たないではいられないのと同じように、神秘家はその真理を広めないではいられないだろう。それは、彼を焼き尽くす愛は、ひとりの人間の神に対する愛ではなく、すべての人間に対する神の愛だからである。彼は、神によって、神を通して、神的な愛で全人類を愛する。それは、哲学者たちの言う理性の名の下の同胞愛ではない。」
「神から神秘家に伝えられた人類愛の方向は生命の飛躍そのものであり、神秘家も全人類にこの躍動を伝える。神秘家は矛盾と見えることを実現し、一つの種であるこの被造物〔人類〕を創造的努力に変え、定義上停止であるものを運動に変えようとする。」「神秘主義とキリスト教とは互いに条件づけ合っているが、起源にはキリストがいる。」

(ベートーヴェン)

これはクリスチャンではない我々には分かりづらいかもしれないが、例えばベートーヴェンが創造的情動によってどのように作品を創ったかということを考えてみれば分かるのではない。つまり、円錐の図で考えると、ベートーヴェンは知性的な平面で単に音符と音符を組み合わせて曲を創ったのではない。次にどういう音が組織されればよいかを円錐の

頂点に位置する「直観」にいちいち尋ねながら、この創造的情動に促されて、まるで生きた有機物ができあがるかのように作曲をしていった。つまり、創造的情動、あるいは「直観」というのは知性以上のものであり、それを指導原理としてあのような作品ができるのである。ベルクソンによれば、ベートーヴェンが作曲するときのあの創造的情動が、神秘家たちが神と合一したときにもつ神秘的直観に近いものである。

(ルソー)

ベルクソンの考えでは、ヴォルテール²⁶ではなく、ルソー²⁷の文筆活動がまさに創造的情動に促されたものである。単に材料を寄せ集め、分析の結果だけを集めて文章を書くのではなく、「直観」という全体から始まって、その全体が生きた諸部分を組織していくように、言葉を連ねて文章を書くのである。それはちょうど神が被造物（個人や社会）をつくる創造活動にも似て、〈一〉なる全体から〈多〉なる諸部分が分たれるように、思考が分節されて言葉が並置されるのである。

(4) 第四章 結び

— 機械学と神秘学 (Remarques finales. Mécanique et mystique)

第四章の「結び」は、機械学(mécanique)と神秘学(mystique)である。これは現在の人類に与えたベルクソンの哲学的遺言であると言ってよい。

ア 物質(機械学)と精神(神秘学)との相互作用

近代の科学に技術が手を携えると、人間は物質的な満足を追い求め、より贅沢なもの、より便利なものを欲することにより、ますます機械学が進んでくる。この機械学について、「出て来た元は同じでも、こちらの方にのみ進み過ぎてしまった。」とベルクソンは言う。現在の人類は、科学・技術の発達により、機械的なものに傾き、物質的な豊かさに押しつぶされているということである。

それに対してベルクソンは、「一方で神秘学が機械学から呼び出されてくる。機械学は神秘学を呼ぶはずであり、また神秘学は機械学に助けられながら逆方向に向く。」という希望を語る。それは一言で尽くせば、物質的な豊かさではなく精神的な豊かさを求めて、生活を単純化する、ということである。さらに、科学が変貌する、すなわち、物質を考える科学的研究が、精神を考える科学的研究へと変貌する、ということ进行期待している。

²⁶ ヴォルテール：1694年～1778年。フランスの文学者、思想家。啓蒙思想の代表的存在で、生前の影響は全ヨーロッパに及び、18世紀を〈ボルテールの世紀〉と呼ぶほどである。悲劇「エディプ」で文名をはせてのち二度投獄され、信教と言論の自由を求める合理主義の啓蒙思想家として活躍。痛烈な風刺と流麗な名文で、近代史家の先駆ともなった。代表著作は小説『カンディード』、論文集『哲学辞典』。ほかに百科全書にも寄稿。

²⁷ ルソー：1712年～1778年。フランスの作家、思想家。当時の人工的退廃的社会を鋭く批判、感情の優位を強調し、「自然に帰れ」と説き、ロマン主義の先駆をなした。思想、政治、教育、文学、音楽などの分野において根本的な価値転換作業を行い、近代思想に多大の影響を与えた。著書は『人間不平等起源論』『新エロイズ』『社会契約論』『エミール』『音楽辞典』『告白』など。

イ デモクラシー：〈自由〉〈平等〉〈博愛〉

民主主義についてもベルクソンは語っている。今日、個人主義、そして自由や平等を公的に保証された個人が、資本主義の市場原理の中で私益を追求する自由を得た結果、大変な不平等の格差が生じており、ギリシアの奴隷制のもとでの民主主義よりも今日の民主主義の方がよほど不平等を拡大している。民主主義に対してこのままの方向でよいのだろうかと言われる中で、ベルクソンは「デモクラシーはあらゆる政治構想のうちで自然から最もかけ離れたものであり、閉じた社会の諸条件を少なくとも志向的に超越する唯一の構想である。」と言っている。つまり、理想的なデモクラシーとは、閉じた社会のものではなく、開いた社会の神秘主義に通じるものであると考える。それはフランスが共和政治の標語としている「自由・平等・博愛 *Liberté, Égalité, Fraternité*」を考えてみれば、よく分かる。自由と平等とはそのままでは相容れない、言わば敵対している二人の姉妹であるが、「元々二人は姉妹だった」ことを思い出させるものとして真ん中で仲介するのが「博愛 *Fraternité*」すなわち「人類愛」である。〈人類愛〉が〈自由〉と〈平等〉とをカスガイのようにつなぐ。ベルクソンの考えでは、デモクラシーの本質は福音書的なものであって、愛を動因としているのである。

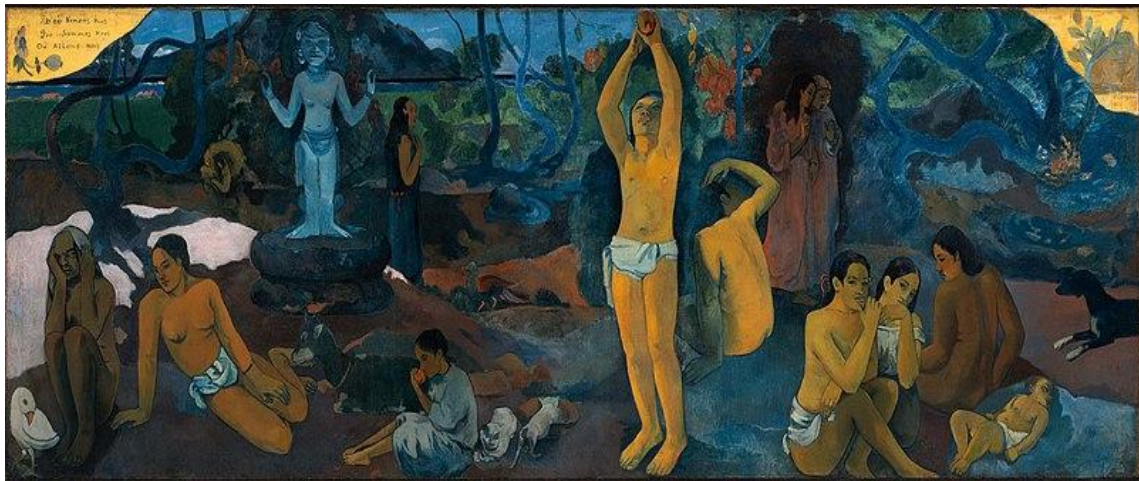
ウ 『道徳と宗教の二源泉』が教示するもの

— 〈我々は何処から来たのか？我々は何者か？我々は何処へ行くのか？〉

『二源泉』の理論的な骨格は、人間の「知性」を真ん中に置いたときに、「知性」以下は蟻や蜂などの昆虫の「本能」、「知性」以上は普通の人間を超えて半分神であるような英雄や聖者の「直観」ということになる。この「本能」と「知性」と「直観」という認識能力の組み合わせを考えることによって、ベルクソンは閉じた社会における二つの道徳と宗教、開いた社会における二つの道徳と宗教を考えたのである。

ゴーギャン²⁸は愛娘が亡くなったときに〈我々は何処から来たのか？我々は何者か？我々は何処へ行くのか？(D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ?)〉という人生の究極の問題に対する答えとして一枚の絵を描いたが、ベルクソンの方では「キリスト教神秘家が、我々が何処から来て、何処へ行くのかを教えてくれる」と言っている。

²⁸ ゴーギャン：1848年～1903年。フランスの画家。20世紀絵画の先駆者。印象派の写実性を離れ、単純な形と原色の併置により絵画それ自体の表現を追求した。35歳で画家として立ち、のちに原始と熱帯の自然にひかれてタヒチに移住した。代表作は「タヒチの女」「黄色いキリスト」など。



ゴーギャン作＜我々は何処から来たのか？我々は何者か？我々は何処へ行くのか？＞
(1897年-1998年)※

(5) 想話的機能と創造的情動が生み出すもの — 宗教、芸術

ベルクソンによると、「想話的機能 (fonction fabulatrice)」が「本能」と「知性」との相互補足によって、閉じられた社会に静態的宗教(神話)を生み出し、「創造的情動 (émotion créatrice)」が「直観」と「知性」との相互補足によって、開かれた社会に力動的宗教(神秘主義)を広げていく。

ルソーやベートーヴェンがいかにして作品を創るかということを考えると、「創造的情動」によって芸術作品ができるという、この高度な感性こそは、愛としての神、崇高な愛を我々が思い描くときに考えなければならないものだということが分かる。

アダム・スミス²⁹『道徳感情論』における共感の頻度と愛着の序列によると、愛というものは自己愛から家族愛、家族愛から祖国愛になり、最後に人類愛に至るという議論になる。しかし、ベルクソンはこれに真っ向から反対している。祖国愛と人類愛と、国家と人類との間には閉じられたものと開かれたものとの間の無限の距離があり、スタティックなものとダイナミックなものとの間の無限の距離があると主張している。開かれたものに行くには、円錐で考えると一度頂点に位置する神のところへ行って、神の愛から神が世界を創造するように、すべてのものを愛する形で降りて来なければ、人類愛は不可能であるという議論である。平面上で少しずつ愛の同心円を拡大していけば人類愛に到達できる、というのは机上の空論にすぎない。実際には、円錐の頂点に収斂しつつ上昇してから、底面に向けて発散しつつ下降するような垂直的な二重運動が必要であり、神秘家は各々そのようにして神との神秘的合一を果たしたのである。

²⁹ アダム・スミス：1723年～1790年。イギリス古典派経済学の創始者。「経済学の父」と呼ばれる。母校グラスゴー大学の教授、のち学長。道徳哲学を講じた『道徳感情の理論』、資本主義の古典とされる『諸国民の富（国富論）』を公刊。富の源泉を労働に求め、「見えざる手」による予定調和を唱え、重商主義・重農主義を批判して、上昇期の産業市民階級の自由放任主義的経済思想を理論的に基礎づけた。

結論 — 世界の平和と人類の幸福（快樂ならぬ歓喜を）

ア よく生きる、シンプルに生きる

『二源泉』の掉尾^{ちようび}にはこうある。「人類は、自ら為しとげた進歩の重荷の下で、半ば押しつぶされて、呻吟している。人類は自分の未来が自分次第だということを充分に知ってはいない。人類は、まず第一に、自分は生き続けようと欲しているかどうかを考えてみなければならぬ。次に、人類が自ら問うべきことは、自分は、ただ生きて行くことしか欲していないのか、それとも、そのほかに、神々を作るための機械である宇宙の本質的機能が、反抗的な我々の地球の上においてでさえ、十分に遂行されるのに必要な努力を提供しようと欲しているかどうか、ということである。」

分かりにくいけれども、要するに、人類は「ただ生きよう」と思っているのか、それとも「よく生きよう」と思っているのかどうか、とベルクソンは訊いている。すなわち、動物のようにただ生きるのであれば、身体の世話をして、快樂を追求するだけで足りるだろう。物質に関わる限りでの科学、そして技術が我々に豊かな生活をもたらしてくるが、そのような物質的に贅沢な生活はどうか、もっとシンプルに生きるということが大切ではないかと問っているわけである。

つまり、動物のように「ただ生きる」ということではなく、人間として「善く生きる」、さらに人類の一員として「美しく生きる」ということは、身体の世話をするばかりではなく、魂の世話をすることである。ソクラテスが言った「魂(プシュケー)の世話をする」ということは、苦行や我慢ではなく、むしろ〈体の快樂〉ならぬ〈魂の歓喜〉を表しており、これこそは芸術や哲学や宗教による贈与である、とベルクソンは教えてくれるのである。

イ 神と人との間にいる英雄、聖者

最後の文章は、原文が“la fonction essentielle de l'univers, qui est une machine à faire des dieux”となっていて、最後の“dieux”「神々」が小文字の複数形になっている。キリスト教は一神教なのに、なぜ大文字の単数形の“Dieu”「神」ではないのか。これについて、プージェ師は「人間があるべきものであるとき、そうであるような神のような存在」と言い、ジャン・ギトン³⁰は聖人のことだと言っている。ベルクソン自身はこれを「神と人との間にいる英雄や聖者」のことであると言っているように思われる。「あなた方は小文字の神々である」とベルクソンは示唆し、「われわれ一人ひとりがそのような英雄や聖者になれるかもしれない」と、祈りをこめて呼びかけているかのようである。

³⁰ ジャン・ギトン：1901年～1999年。フランスのカトリック 哲学者、神学者。「最後の偉大なカトリック哲学者」と言われた。

このような「小文字の神々」の一人として、例えばマザー・テレサ³¹がいる。テレサの言葉は実にベルクソンのいう神秘家の言葉（「神は愛であり、愛の対象である」）と似ていて、「God is Love. (神は愛である) and He loves you. (彼はあなたを愛する) Love others as He loves you. (神があなたを愛するように他の人々を愛しなさい) and through this love bring Peace in the World. (この愛を通して世界に平和をもたらしなさい)」と言っている。

ウ 人間の再定義 —「シンギュラリティー」を考える

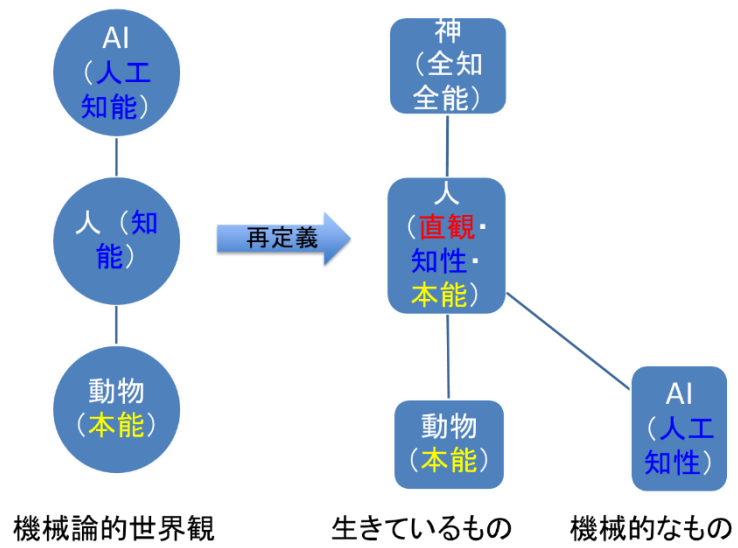
最後に、皆さんに考えていただきたいのは「シンギュラリティー³²」の問題である（別図「シンギュラリティー」参照 p 26）。生成 AI が生まれた現在、「人間的知性が人工的知性に追い越される日も近く、人間と機械とで主従が逆転するのではないか」という議論がなされている。たしかにインテリジェンスという点では、人間は機械に及ばないであろう。機械論的世界観に立てば、動物<人間<AI という序列が成り立つ。しかし、人間を別の観点から再定義することができるのではないか。これまで、人間は動物との種差によって「知性を有する動物＝知性人(ホモ・サピエンス)」として定義された（リンネ³³の『自然の体系』）。けれども、われわれはここで、「知性」ではなく「直観」という観点から人間を定義しなおすことが可能である。すなわち、人間は AI との種差によって「直観を有する人間＝直観人」として定義し直せる。制作する人間、すなわち知性を有する動物としての「制作者(ホモ・ファーター)」ではなく、創造する人間、すなわち小文字の神々としての「創造人(ホモ・クレアトゥール)」というかたちで人間を再定義することができるのである。この観点に立つとき、イノベーションとクリエーションとの違いがはっきりするであろう。イノベーションは、既に在るものの組み合わせを変えることによって可能になる革新であるから、「制作的知性」のなせる機械的な活動であるのに対して、クリエーションは、未だ無いものを新たに存在させる創造であるから、「創造的直観」のなせる生命的な活動なのである。今日では「生成 AI」が創造に携わるかのように言われているが、それは「知性」の延長上にあつて生産性を向上させる能力ではあっても、全く新しいものの出来を可能にする「直観」とは異なることに注意したい。

³¹ マザー・テレサ：1910 年～1997 年。カトリック教会の修道女にして修道会「神の愛の宣教者会」の創立者。「マザー」は指導的な修道女への敬称であり、「テレサ」は彼女の敬愛したリジューのテレーズにちなんだ修道名である。カルカッタで始まったテレサの貧しい人々のための活動は、後進の修道女たちによって全世界に広められている。生前からその活動は高く評価され、1979 年のノーベル平和賞など多くの賞を受けた。

³² シングュラリティー：AI（人工知能）が人類の知能を超える技術的特異点（転換点）や、AI がもたらす世界の変化を示す言葉。未来学上の概念のこと。近年は ChatGPT をはじめとした AI 技術が一般にも普及したことを背景に、シンギュラリティーや AI に対する関心が高まっている。

³³ リンネ：1707 年～1778 年。スウェーデンの博物学者、生物学者、植物学者。それまでバラバラだった植物名を、一定の規則に従って命名する「学名」を考案した。それは植物を「属名」と「種名」であらわす二名法で、植物から生物全般に応用されて現在まで広く用いられている。現生人類をホモ＝サピエンスと名付けたのもリンネである。

シンギュラリティー



質疑応答

- Q1 ベルクソンの時間の捉え方の他者との違い、禅との違いは何か
- Q2 「世界の平和と人類の幸福」において自然の循環はどう捉えられるのか
- Q3 古くからの日本人の考え方とベルクソンの考え方はどう比較できるのか
- Q4 「直観」で自分を見ると、どのような自分が見えるのか
- Q5-1 どうすれば「直観」を身に付けることができるのか
- Q5-2 本質を見極める力をつける方法や判断基準はあるのか
- Q5-3 共感を呼ぶことが本質に近づくことになるのか
- Q5-4 「シンプル」は直観力を付けるためのツールになるのか
- Q6 心理学、精神分析学におけるベルクソンのエピソードはあるか
- Q7 無意識の概念をベルクソンはどう捉えているのか
- Q8 仏教の概念とベルクソンの哲学の関係についてどう捉えるか
- Q9 ベルクソン哲学を学ぶための入門編はないか

Q1 ベルクソンの時間の捉え方の他者との違い、禅との違いは何か

時間とは「持続」した時間であって、定量化された空間的な時間ではないということだが、アインシュタインによると、ビッグバンのエネルギーから時間と空間が生まれ、時間と空間はイコールで、それが分化したものと考えられるところ、ベルクソンの言う時間の優位性は、アリストテレス以来進んできた定量化された空間的な時間の概念に対するアンチテーゼもあったと思う。ただし、一瞬の中に永遠を見るような永遠の時間という考え方と、もう一方には無限あるいは場所的な設定という捉え方があるのではないか。そういう観点で西田幾多郎の「場所」の論理はその点を追求したのではないか。

また、九鬼周造は「禅」と捉えているようだが、神の存在規定からすると、絶対有であって、絶対無としての仏の在り様とは異なるので、単純に「無」を起点とした捉え方は違うのではないか。「空」や「無」というものになった場合、時間論も空間論も道元³⁴に見られるように変わってくるのではないか。ベルクソンは生命哲学という意味で先鋭的な課題だと思うが、それを新たに発展した形で取り上げることが必要ではないか。

(瀧)

ベルクソンの時間の考え方は、ビッグバンの時に空間と時間が同時に生まれたというような話ではなく、プロティノスの「世界が一者からどのように出てきたか」ということと大きく関わっている。アリストテレスは、空間を移動するから時間ができるというように、空

³⁴ 道元：1200年～1253年。鎌倉時代初期の禅僧。日本における曹洞宗の開祖。主著の『正法眼蔵』は、和辻哲郎やスティーブ・ジョブズら後世に亘って影響を与えている。

間が先で時間が後からできると考えるが、プロティノスの場合は一者からまず知性が出て、そこから魂、すなわちここで時間が出てきて、続いて魂から質料＝物質、つまり空間が出てくるといふ、時間の方が空間より先にできているという考え方である。

ベルクソンもそういう意味では同じである。空間化されるということは、魂の生きていた時間、これが質料の分散した死ということになるので、空間的な次元に落ちた時には、知性から発出した魂の継起的運動における生だったものが、ここから出てきた質料の分散した死になる。つまり、時間が先か空間が先かという点で、時間が先だという考え方は、魂が先か物質が先かという問いと連動していて、普通は空間があつて、そこに時間ができてくるか、物質があつてそこに精神ができてくると考えるが、プロティノスもベルクソンも逆である。時間があつて、あるいは魂があつて、次に身体ができ、あるいは空間ができる。生きているものが死んだ形になるという序列が考えられている。そういうプロティノスの序列の考えを、ベルクソンは時間論ということで参考に使っているのは確かである。

また、道元の「有時³⁵」などは私も勉強したが、ベルクソンと近いところがあるし、鈴木大拙もそれについて述べているので、簡単に一言で禅とは違うとは言えない。ただ、私が言っているのは、西田幾多郎や九鬼周造が「ベルクソンの直観は禅に近い」という考察をあつての時点ではっきりと言っていることをどう考えるかということである。私は個人的には道元が最も偉大だと思っているし、「有時」という章は本当に素晴らしいと思うが、そこに関してはベルクソンの時間論、あるいはもっと遡るとアウグスティヌスの時間論があつて、そのプロティノス→アウグスティヌス→ベルクソンという西洋的時間論の流れと比較するかたちで道元の東洋的時間論を考えている。さらに神学的な文脈を付け加えるならば、〈有に発する西洋のアナログ・エンティス（存在の類比）〉と〈無に発する東洋のアナログ・ニヒリス（無の類比）〉とを比較することが必要である。さらにまた、〈「ある」を基本とする西洋のオントロギア（存在 on 論）〉と〈「もつ」を基本とする東洋のエコントロギア（所有 echein 論）〉との比較へと考察を進めることも可能である。

Q2 「世界の平和と人類の幸福」において自然の循環はどう捉えられるのか

最後の「世界の平和と人類の幸福」に関しては、私なりに解釈すると、「自ら為しとげた進歩の重荷の下で、半ば押しつぶされて」というのは、人類は今豊かで、特に日本は平和で進んだ文明を堪能しているが、それに伴って地球温暖化が進行し、この数年は自然災害が激甚化し頻発していることから、人間が自然を相手に十分考えて生活を正すことができないことを述べているのではないかと考えた。

さらに、プラスチック製品が身の周りに溢れ、このままでは 2050 年には海洋に棲息する魚よりもマイクロプラスチックの量が多くなると言われている。さらに悪いことに、マイクロプラスチックは人間が大量に排出している農薬や環境ホルモンに類するものを吸着し、

³⁵ 有時（うじ）：道元の主著『正法眼蔵』の中の一巻。「いわゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。」道元の時間論を著している。

結局、人間の身体の中に入ってくる。そういう自然の循環理念がなかなか理解できないのではないかと思う。

その他、「宇宙の本質的機能が、反抗的な我々の地球の上においてできえ」というところは、人間が冷静に自分の力と今まで築き上げてきた文明の力と自然界の猛威に対して人間は小さなものだという、自然循環等を言っているのではないか。

（瀧）

自然破壊の問題や、プラスチックが細かく砕かれても結局は人間の身体に入っていくという問題は、喫緊の問題である。一つ言えるのは、原発の問題もそうだが、ものづくり日本と言われてきたことから分かるように、これまでは科学と技術とはものを作る、産出するというかたちで発達してきた。ところが、作ったものを壊す、無くすという技術は発展しなかった。そこで、今後の科学・技術は出てきたものや既にあるものを無くするという、核廃棄物の問題がそうだが、そういうネガティブな消去する技術（technica negativa）を考えなければならないと思う。

二つ目の「反抗的な我々の地球に上においてさえ」というのは、人間がもし魂だけの存在で、身体という物質がなかったらば、魂はクリエイティブな力を無限に伸ばしていくことができるだろうが、地球上では物質が生命と一体となった形で、例えば人間は心と体とが一体となった形で生きているので、「反抗的な地球」というのはスピリチュアルな力そのものが無限に進んでいくことを物質が妨害する、あるいは自然が妨害するということである。したがって、自然を精神が征服しなければならないという考えが、17世紀のベーコンやデカルト以来、西洋ではあったわけだが、そういう意味で、どうしても障害になるところの物質的な、あるいは自然のあり方をここで考えている。

つまり、神々のような存在であれば、肉体の制約から免れた魂だけの存在なので、生きたエネルギーが自由に自らを展開させることができるが、ベルクソンの観察では、不幸にして地球は物質的なものに絡めとられてしまっているもので、同じところをグルグル回って前進できないでいる。例えば、動物で言えば「種」という形で固定している。本当は物質がなければ、肉体や生物の身体という形をとることなく、生き物は命そのものが物質的な在り方ではない在り方で実在している可能性がある。これは想像し難いかもしれないが、宇宙にはあるかもしれない。

これを皆さんが分かりづらいと思われるのは当然であり、我々は物質中心にものを見ているので、目に見えたり、手に触れたりするものが本当に存在していると考え。したがって、目に見える身体は存在しているが、心は目に見えないので、脳の運動が心というものに反映しているのだらうと科学は説明する。ところが、実は逆で、目に見えないものが本当に存在していて、そちらの方がリアルであり、それが物質という形で固定して渦巻いて停止して死んでいるとベルクソンは逆転して考えているのである。そこが分かりにくいかもしれない。

「エラン・ヴィタール³⁶」の「エラン」とは、まさに生命が花火のように発散するけれども、それが物質的なものの抵抗を受けて地上に落ちてくるところで下降運動が物質的な身体の形をとる。もし物質がなければ、そういう意味での上昇があって、それこそが本当にリアルにあるものとなる。目に見えないものこそがリアルにあり、空間で固定しているのは物質の運動で、時間の中で魂が動いているものこそ本当にあるということである。魂の運動（motion）としての情動（emotion）は目に見えたり手に触れたりすることはできないけれども、「ある」という意味ではこれこそ本当にある。それが生きているということである。

逆に言うと、物質的に凝り固まると顔の表情もなくなってしまうなど、すべて固まってしまつて、それは見えるけれども死んでいるわけであり、本当にあるのではない。これはプラトンもそうだが、現に目に見えるものとは本当のリアルなあり方からすると実はリアルではなく、影や幻に過ぎないと考えて、身体よりも心、物質よりも精神が第一義的に存在すると考える伝統があるが、不幸にして我々の現在は、唯物論を基底とする近代科学の機械論的な世界観が常識であるから、実際に手や身体で操作できない対象、あるいは観察できない対象は存在しないし、あるいは存在していても二次的な形でしか存在しないというように考えている。これは逆だとベルクソンは言いたいわけである。

Q3 古くからの日本人の考え方とベルクソンの考え方はどう比較できるのか

お話を伺って頭に浮かんだのが「色即是空³⁷」や『理系白書³⁸』である。ホンダや日産の技術者たちが懸命に車をつくる一方で、ものをつくれぬ権力欲の強い人たちの金銭欲や名誉欲に左右されて会社が潰れたり、ものづくりが廃れたりするような話が浮かんだ。

また、以前、縄文文化に係る講演でカタカムナ文化³⁹の話が出たが、日々のこの瞬間に身を入れて生きることによって技術が洗練され、芸術が素晴らしいものになるということ

³⁶ エラン・ヴィタール：élan vital「生命の飛躍」の意。『創造的進化』に用いられたベルグソンの自然哲学の主要概念であり、「精神的エネルギー」の語も同義。1824年にS.カルノーが発見したエネルギー散逸法則に注目した彼は、この法則から自然が平衡状態への傾向をもち、平衡に達するとエネルギーの源泉が涸れることを看取し、エネルギーの源泉を問うて全存在の根底に生命力としてのエラン・ヴィタールをおいた。エネルギーは散逸する以前に創造力であり、エランは上向して精神へ向う創造力となり、生命が下向しエランを失うと物質に向う。そこに機械的自然観で失われていた、アリストテレス以来の無機物-植物-動物-精神存在の位階が、エラン・ヴィタールを一元的原理として復活された。

³⁷ 色即是空：『般若心経』等にある言葉で、仏教の根本教理。この世のすべてのものは恒常な実体はなく縁起によって存在する、という仏教の基本的な教義。空即是色と対をなす。色（ルーパ）は、宇宙に存在するすべての形ある物質や現象を意味し、空（シューニヤ）は、恒常な実体がないという意味。すなわち、目に見えるもの、形づくられたもの（色）は、実体として存在せず刻々と変化しているものであり、不変なる実体は存在しない（空）。仏教の根本的考えは因果性（縁起）であり、その原因（因果）が失われれば、たちまち現象（色）は消え去る。

³⁸ 『理系白書』：毎日新聞科学環境部（2003年）。日本の高度経済成長を支えながらも、文系優位の社会で、その存在がかすみがちな「理系」。深刻な科学離れが叫ばれるいま、その地位、報酬、研究、カルチャー、教育、結婚など、理系のすべてを初めて浮き彫りにした渾身のレポート。第1回科学ジャーナリスト大賞受賞作品。

³⁹ カタカムナ文化：縄文時代よりはるか昔、1万2000年以上前にあった超古代文明の一つ。

日本人は昔から理解し、八百万の神やものには生命が宿るという考えもあったと思う。先生はそういうことを鑑みてどう考えられるか。

(瀧)

「身を入れて生きる」というのはよく分からないが、例えば、「日本人は昔から」と言われ、「もの」ということを言われた。「もの」については、現在の日本人は完全に西洋化していて、物質的なものを「もの」と考える。ところが、以前はむしろ逆で、例えば明治の『大言海』などの国語辞典を引くと「もの」として出てくるのは魂や神などであり、「もののあはれ」やスピリチュアルなものである。つまり、我々は「心」に対して「もの」、「精神」に対して「物質」と捉えているが、実は「もの」は「もののけ姫」の「もの」でもあるし、霊的な実体、あるいは力を指してきたという伝統がある。それを我々は忘れてしまい、今の日本は戦後に宗教から離れ、人間を超えた絶対的なものに対する畏れも忘れ、すべて物質的に人の計らいで何とかなる、技術の発揮できるところだと考えているところにこそ問題がある。

したがって、「もの」とはどういうものかと考えるときに、例えば、本居宣長も平田篤胤もそうだが、神道を考えたり、神道の人たちが書いているものを読むと、今の我々がいかに西洋的な二元論で、しかも物質中心にしか考えていないかということに改めて唖然とする。水木しげるの作品が流行るのは、そういう意味で *mystique* なものへ戻っているという反動とも考えることができる。

要するに、西洋化される以前の日本人の「もの」の見方は、すべてを「持続の相の下に」見ようとするベルクソンの世界観に通じているのである。

Q4 「直観」で自分を見ると、どのような自分が見えるのか

ベルクソンが言う「直観」で自分を見ることができたら、どのような自分が見えるのか。

(瀧)

一言で言うと、ベルクソンが「持続」と言ったのは、まさに「直観」で自分を見たときに見える在り方である。我々が自分の心を自分で見ようとすると、例えば「今は悲しい」「今は嬉しい」という言葉で、心がまるでものの塊ごとに変わっていくかのように考える。ところが、言葉を取り払い、目で外界を知覚するのではなく、内側の世界を内観するような形で見る、つまり自己自身に対して「直観」すると、そこで見えてくるのは、相互浸透しながら一刻たりとも同じ繰り返しもない、実にたくさんのニュアンス、変化そのものである。流動的というと物質的なものを想像してしまうし、無限のスペクトルの変化というと空間的な広がりを想像してしまうが、変化そのもの、変化しかないものを我々は「直観」することができる。それがベルクソンの言う「内的な持続」である。

目を開いているだけでは、物質的な、固定化して死んでしまっって手に取りやすい、生活の

ために有用な形しか見えない。知覚そのものは物質界の本当の姿ではない。我々の内界に対しても、同じように言葉で「自分がどうであるか」を必ず考えるし、区切って考えて、時間的に生きられる時間を空間的にそれが過ぎ去ったものとして考えるので、我々は自分を「直観」することができない。でも、もし自分を「直観」することができたら、『創造的進化』であれば、まさに生命の生命たる領域に連れていかれる。それは生物ではない。生物は命が身体を持って動いていて観察できるものだが、命を動かしている力そのものはそうではないし、生命そのものは犬にもあるし、我々の中にもある。生命そのものというのがまさに「持続」で、「直観」はこの「持続」に与らせるのである。

別の言い方をすると、我々の本質は時間ということになる。つまり、過去の記憶が現在の中に流れ込みながら、未来のことを予期しつつ動いている厚みのある今、数学的に細かく時を刻むのではなく、常に過去のことを今に蘇りながら、話していても次のことが考えられるような、過去・現在・未来が一つの厚みのある流動的な形で動いている、これを「持続」と言う。普通、持続と言うと、変わらないものが同じままであることと考えるが、全く逆で、むしろ変化しかない。したがって、少しでも何かがあると、たとえば水に何かを1滴入れると全部の色が変わってしまうように、すべてが変わり続ける。

そういうことなので、逆に言えば、我々が自らを「直観」することはほとんどなく、「直観」したとしても、例えば、瞬いた北極星を一生懸命に掴んでやっとな掴めるくらいの形でしか自分というものを捉えられない。我々は自分の本当のあり方からは遠ざかってしまい、命そのものからも遠ざかってしまっていて、半分身体に引きずられながら半分死んで生きていると言える。極端に言えば、そういう中で本当の命を取り戻すことが内的直観によって捕まえるということであり、これを物質界に向けて知覚する代わりに、物質の中にも「持続」があると考えると、我々の心の世界も「持続」だけれども、リズムは違っても物質の世界や宇宙全体も一つのリズム（持続）に連なっていることが分かる。リズムというのは、必要な時間でしか動けないということで、ベルクソンの比喻で言えば「もし私が砂糖水を1杯用意したかったら、どうすることもできない。砂糖が溶けるのを待たなくてはいけない。」つまり物質的な世界は一瞬で扇を開けるようには展開しない。然るべき時間の中で段々と展開していく。その然るべき時間の中で、例えば砂糖が水に溶けていくことが物質界における独特の持続という変化そのものである。しかし、私の「持続」は砂糖水の「持続」とは違うので「まだ溶けないのか」と待ち遠しい。私のリズムとコップの中の砂糖水のリズムは、それぞれリズムが違うが、その違いを我々は「待ち遠しさ」として体験している。それは時間を体験していると言ってもよい。

そういうことで、「直観」をまずは我々の内的な「持続」に向けるけれども、外的なものに向けることもできる。あるいは、物質的な宇宙の元は「エラン・ヴィタール」であり、さらに「エラン・ヴィタール」の元は「エラン・ダムール」（愛としての神）というように向けていくことができる。

Q5-1 どうすれば「直観」を身に付けることができるのか

一番重要なのは「直観」だと感じた。その「直観」をどうしたら身に付けることができるのかというのが一番の関心事である。例えば、円錐の図の真ん中が神の存在で、直観と感ずるべき魂の根本がある。そして、モナ・リザの魂があって、そこから虚像のように現れているのが我々の見ている世界だと理解したが、ではそのモナ・リザが何を考えているかという根本をどう捉えればよいのか。それを捉えることが非常に大事だが、それが今の日本人に欠けている点ではないかと思うので、サジェスションをいただければと思う。

(瀧)

大変素晴らしい質問で、それが一番大事である。つまり「そういう直観がある」と言われると「そうか」としか言えないし、でも自分は「直観」を経験したことがないので、どうすればそういう「直観」が身に付くのかという現実的な問題として考えるということである。

「直観」にも、芸術的な「生命のイメージを直観する」ものもあれば、哲学的な「生命そのものを直観する」というものもあるし、あるいは道徳的な、あるいは神秘直観として「愛としての神を直観する」等、ベクトルの射程距離は違うが、それがどうすれば身に付くかということと比べると良いのはプラトンである。プラトンの「直観」は、神、あるいは善、イデア⁴⁰を見るわけだが、そのためには「肉体を捨てろ」、物質的なものから 180 度目を背けて魂の方へ上って行けと言っている。ここが一番大事なのだが、ユダヤ・キリスト教の伝統では肉体や物質に対する拒絶はなく、霊肉一致なので、身体的なものを否定しない。ところが、古代ギリシアでは肉体的なものから目を向け直すので、身体を捨てていくわけである。

ベルクソンの場合はそうではない。「肉の目を延長して心の目にしなさい」というのがベルクソンの「直観」の身に付け方である。例えば、我々は色を見ることができるけれども、光そのものを見ることはできない。光そのものを「直観」したければ、例えばルビーの赤い色を肉眼でしっかりと見る。そうすると、赤い輝きが肉の目で見えているときに、その赤い色を輝かせている、それ自体は見えない光そのものが心の目で見えるようになる。つまり、肉体的な知覚が知的な「直観」へと延長されてくる。

ベルクソンの「直観」というのは、そういう意味で身体を否定せずに、それを強化する。したがって、芸術的直観は否定されない。イメージに泥んでいても、そのイメージの向こうに、見えるものを通して見えないものを見る。西田幾多郎の言う日本人と日本文化がそうで、見えるものを通して見えないものを見る、聞こえるものを通して聞こえないものを聞く。これは物質的なものや身体的なものに相反する形で霊的に飛んでいくのではなく、心身をそのまま使いながら、つまり、実際の知覚を大事にしているけれども、それを現実的な有用のために型にはめて記号化して見るのではなく、そのもの自体を見る。直下（じきげ）に見るという、禅の生き方と似ているところがあると思う。

⁴⁰ イデア：見られたもの、知られたもの、姿、形の意。プラトン哲学で、時空を超越した非物体的、絶対的な永遠の実在。感覚的世界の個物の原型とされ、純粋な理性的思考によって認識できるとされる。

Q5-2 本質を見極める力をつける方法や判断基準はあるのか

今見えているものは幻かもしれないが、それが投影しているので、そこから本質を掴めということだと思う。どうすれば、本質を掴めるのか。下手をすれば思い込みになってしまうし、自己中心的な見方になってしまうので、本質を見ていることにはならないかもしれない。それを見極めるための力、あるいはそれが本質かどうかを判断できる基準や方法はあるのか。

(瀧)

それも大変高度な質問だと思う。例えば、ベルクソンが挙げている多くの神秘主義者は皆「神を見た」「神と合一した」と言っているが、これはどうかしている人が夢を見ているようなことを言っていると捉えられるかもしれない。どうすれば経験的な事実として検証できるのか、こういう問題だと思う。

一番検証し難いのは神秘的直観だが、それに対してベルクソンが言っているのは、神秘家たちは伝承的な影響関係、つまり、誰かが書いた同じ内容のものを読んだということが全くないような関係にあり、相互に時代的にも地域的にも影響を持てないようでありながら、全く同じことを言っているということである。時代も地域も隔てられているのに、どうして証言の言葉遣いそのものからして同じなのか。それは「彼らが見ていたものが同じ一つのものだった」からである、というのが一番正しい説明となる。

ベルクソンの哲学的な言い方では「側方交会術⁴¹」と言われているが、建築家が実際に到達できない所までの距離を測る時に測定する方法を形而上学でも取り入れており、例えば、神秘家 A の証言と神秘家 B の証言をプロットしていくと中心に収斂していく。初めは分からなかったけれども、後になって見ると、彼らは同心円上に並んでいて、しかも中心の全く同一の一点を見ていたと思うほかないような証言をしている。これは経験のない人にとっては、事実かどうか疑わしいと思われるかもしれないが、そういうことが起きていることをどうすれば説明できるのかという問題になる。神秘家たちは狂人ではなく、普通に日常生活を営めるし、知的にも劣っているわけでは全くない。けれども、スピリチュアルな力によって他の人に見えないものを見ている。

例えば、テレポート⁴²や千里眼⁴³などの心靈的な科学は、今の科学では「そういうものは眉唾で偶然だ」と言われるが、ではなぜそのようなことを「見た」「聞いた」経験をした人

⁴¹ 側方交会術：直接距離が測れないときに地形や地物を作図する方法。山や丘の稜線などを描くのに適している。まずは、既知点 A に平板を据え付け、未知点を視準し、方向線を引く。次に、未知点に据え付け、別の既知点 B を視準し、方向線を引く。このときの交点が未知点であり、既知点を 3 点以上使用すると精度が向上する。

⁴² テレポート：瞬間移動。超能力の一種であり、物体を離れた空間に転送したり、自分自身が離れた場所に瞬間的に移動したりする現象および能力のことである。念力の一種と考えられている。

⁴³ 千里眼（せんりがん）：道教における神・媽祖に仕えている神の名。また、この神が持っていたとされる遠い場所のことをよく見知っていたり、まだ起きていない未来のことがわかる能力のこと。

が次々に現れるのか、どうすればそれを科学が説明できるのか。もしそれが事実なのに科学が説明できないとすると、それは科学が物質中心にしか見ないからである。今の科学は心霊的なもの、スピリチュアルなものの存在を疑ってかかるけれども、物質的に見えているものよりもスピリチュアルなものの方が実在性が高いと考えた途端に、科学が精神を研究する学科であったとしたら、現在の世界観は機械論的世界観とは全く別の *mystique* な世界観になっていたはずである。したがって、本当のものの見え方が違っていたはずだと思うが、そうはっていない。

Q5-3 共感を呼ぶことが本質に近づくことになるのか

私は科学技術でイノベーションを起こす仕事をしているが、最近、精神論的なことが多くて、シーズが良くてもなかなかイノベーションが起きない。それをいかに育てて共感を呼ぶかということが大事になるが、先生の講演は、まさに、別の人が見て共感を呼ぶことで本質に近づけるのではないかと理解したらいいのか。

(瀧)

その理解は素晴らしい。まさに共感を呼ぶかどうかである。例えば、芸術でも、天才的な作品は、初めは誰も受け入れないが、宗教の聖人や英雄がそうであるように、存在自体が呼び声になって、その作品が世界の周りの美意識を少しずつ変えてしまう。

例えば、フランスの印象派のルノアールが登場したときも、アカデミーの描き方は、人間の肌の色は艶々で陰りのない美しいものでなくてはならないと考えられていたが、ルノアールは木漏れ日の中で身体に斑が付いているような描き方をしていたので、当時の人たちに「死体が腐っている」と批評された。ところが、その作品は、日光にキラキラと輝く美しい裸体の本当に生きている様を描いていたので、周りの美意識そのものを変えてしまい、今では日本で喫茶店の名前になるほどポピュラーになっているし、印象派展を開催すると必ず一定数の動員数を確保できるくらいになってしまった。これはその天才的な作品が、初めは周りを驚かせ、承認させなかったけれども、段々と共感の輪を広げていくことができたという例である。

Q5-4 「シンプル」は直観力を付けるためのツールになるのか

ルノアールがそういうことに気づいたのが非常に優れた点だと思うが、もう一つのキーワードとして「シンプル」「単純」と言われた。それが直観力をつけるための一つのツールになるのか。

(瀧)

ベルクソンは「直観がもし存在するとすれば、それは単純なアクトである」と言っている。アクトとは魂の動きそのものであり、行為と訳すと意味がおかしくなる。魂そのものが動い

ている単純なことである。この単純性は「単純なものへ帰ろう」ということで、ソロー⁴⁴は『ウォールデン 森の生活』の中で、19世紀の半ば頃に「皆が本当に贅沢をしているけれども、もっと単純なものに帰って本当の幸せが何かを見つめ直そう」と言っている。

それと同じで、単純な生活に帰るということは、決して禁欲的に我慢することではない。身体の喜びとしての pleasure ではなく、魂の喜びとしての joy、つまり快楽的、物質的なものではなく、歓喜としての魂そのものの喜びが単純な生活の中で与えられるということで、贅沢を我慢して物質的な豊かさを見切って捨てろというような教えでは全くない。本当の豊かさは心の豊かな側にあるので、これを快楽と歓喜、つまり快さと喜びの違いとしてベルクソンは考えていて、「喜びのあるところ、生命の勝利がある」と言っている。

快楽だけを追求していると身体を壊すことになる。そうではなくて、本当に飲むべきことをなぜ人はできないかという、身体が死ぬと自分も死ぬと思っているからである。身体に執着するのは物質的な快楽に執着すること、つまり李白⁴⁵が「浮生は夢の如し 飲を為すこと幾何ぞ」（この世は短いだからどのくらい快楽を得られるのか）と言っているのは、地上にいる身体的な生命が自分の生命の限界だと考えているからだ、魂が身体から離れても不滅だとプラトンは教えているし、輪廻を教える世界のあらゆる地域の人々が考えるように、身体の快楽がなくなっても、魂の歓喜までがなくなるわけではない。敢えて快楽に固執せず、本当の喜びを確保しようということなので、決して禁欲主義の痩せ我慢ではないのが「シンプルな生活に帰る」ということだ。

Q6 心理学、精神分析学におけるベルクソンのエピソードはあるか

ベルクソンはフロイトと同時代の人だが、催眠術を研究していたと聞いている。また、ピエール・ジャネ⁴⁶とも親友なので、彼らとの歴史的なエピソードはないか。

（瀧）

ベルクソンは若い頃から心霊を大事に考えていた。ただし、始めはマテリアリスト（唯物論者）の立場に立っていたので、例えば、後ろを向いたまま会場に出された合図が見えるという現象、つまり頭の後ろに目が付いているかのような透視ができるのはなぜかという問題に対して、ベルクソンは、非常に知覚が強化されていて、反対側を見ている人の瞳に映っているものを読んでいると説明している。

ところが、これは科学で普通に説明ができる話だが、面白いのは、ある女性が、自分の夫

⁴⁴ ソロー：1817年～1862年。アメリカの思想家・随筆家。簡素な生活をしながら読書・思索に専念した。特にマサチューセッツ州コンコード近郊のウォールデンの湖畔で自給自足の孤独な生活を2年あまり送ったことは有名。『森の生活』（1854）は当時の記録で、やや東洋的な人生観や自然観が盛られている。また熱心な奴隷制廃止論者であった。

⁴⁵ 李白：701年～762年。中国の盛唐の時代の詩人。唐代のみならず中国詩歌史上において、同時代の杜甫とともに最高の存在とされる。奔放で変幻自在な詩風から、後世に『詩仙』と称される。

⁴⁶ ピエール・ジャネ：1859年～1947年。フランスの心理学者。フロイトと同時代に活躍し、下意識、解離、心的エネルギー、意識野の狭小などの重要概念を生み出した。

が英仏海峡を離れて亡くなった時に夢枕に立って、死んでいく様子を克明なイメージとして妻に伝えたという話である。そこで、妻がそのイメージを確かめてみたところ、当時、その場にいた人が口をそろえて「全くその通りの状況だった」と言った。しかも夫は妻の夢枕に立ったその時に亡くなったことが分かったのである。そこで妻は「夢が現実になったが、これはどういうことか」と心理学の先生に質問した。すると心理学の先生は「それは偶然だ」と答えた。そして「現実合う正夢もあれば、現実合わない夢もある。あなたの場合は夥しい数の夢の中からたまたま現実合った夢をみただけだ」と説明した。確率的にはほとんど 0 に近いような説明を平然とするというのは、心理学が科学としてどこかおかしいと言わなければならない。たった 1 例でもそういう経験的事実があるなら、それを説明できない心理学は心理学の方法そのものが問われなくてはならない。

そこで、ベルクソンはその女性に、それは実際に現れたのであり、魂は身体が空間的に隔てるものではなくて、言わば時間のリズムの中で動いているものだから、空間をワープしてその人の脳裏に同じリズムで現れたと説明した。例えば、一方で動いている波長と他方で動いている波長のリズムが同じなら当然見えるという現象が起きる。ベルクソンはそうのように説明している。ベルクソン自身は心霊学会の会長を務めていたので、そういう意味で心霊術を大事に研究していた。

Q7 無意識の概念をベルクソンはどう捉えているのか

無意識という概念が重要になると書かれていたが、それについて教えていただきたい。

(瀧)

フロイトとの対決はなかったが、無意識そのものはベルクソンのキーワード中のキーワードである。つまり、意識というのは、実際の表象と行為が離れた時に、その落差が意識として現れるので、無意識というのは、表象と行為が一つになっている。例えば、夢遊病のように眠ったまま歩いて行くのは、歩行する表象（イメージ）と行為とが一つになっているということだと説明する。

ただ、意識の問題については、ベルクソンは、プロティノスのように、人間の意識は巨大な宇宙意識、宇宙靈魂が縮小して肉体に落ちて来た、そういう限定されたものだという意識論をとっている。したがって、知性が意識の中心を占めて、その周りには無数の無意識の波が広がっている。ここは個人の意識を超えて全体の種の意識や、もっと昔の意識、あるいは宇宙の意識というような形而上学的な意識そのものから自己限定としての私という、個人における精神に縮減されるという形なので、出発点は心理学が対象にしている、現に私がどう意識しているかということではなくて、何が私のこの意識に限定させてきたのかという順序で考える。

Q8 仏教の概念とベルクソンの哲学の関係についてどう捉えるか

私は仏教者だが、仏教は釈尊の悟り、「直観」が基になって宗派が成り立っている。私の宗派は浄土真宗で、他力と自力という話がいつも出てくる。浄土真宗は絶対他力、他力本願で自力は否定的だが、自分の中では、自力は自分が生きようとする喜びであり、他力は生かされる喜びではないかと思っている。先ほど言われた神＝一者から来るという部分は生かされている部分、仏教では「仏様から命を頂く」など信仰的な言い方があるが、自分の生きる力と生かされる力の両方が歓喜につながるというところで、自分の思っていたことを哲学的に考えられている方がいたことを知った。

そういう中で、私がいつも悩んでいるのが時間である。過去と現在と未来は時間の流れだと思うが、過去は戻れないし、未来は掴めないし、基本的には今しかないという話をよくする。人間的に言うと、過去は反省しなければならないし、未来は夢を持ちなさいという話になるかもしれないが、突き詰めると、過去にいくらこだわってもどうしようもないし、未来はどうか自分では分からないということで、今しかないので、時間という観念とは別に今の積み重ねしかないだろうと自分の中では思っている。この時間の難しい哲学的なところ、今私が思っていることとの関係についてはどう考えられるか。

(瀧)

仏教の方から示唆的な意見をいただいた。「上から頂く」という受動的なことと、自分が生きていくという能動的なこととの相即性をご指摘の通りである。例えば、キリスト教には「*gratia*」という言葉があるが、英語では「*grace*」と言う。この「*gratia*」は神から人へ与えられる恩恵を意味するが、優美という意味でもある。優美な運動をするという、人の側の美的な部分と、恩恵を与えられて恵まれるという宗教的、あるいは倫理的なことが相即しているのはとても良い例だと思う。内村鑑三⁴⁷も「心を開かなければ光が入って来ない」「自分で清くなろうと思っている段階では清くなれない。それが罪だ」と言っている。

また、現在か過去か未来かということでは『正法眼蔵⁴⁸』の中に徳山宣鑑⁴⁹の「過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得」という問いがある。徳山は金剛經の立派な注釈書を書いて「最近、禪という不屈きなものがあるので行って論破してやろう」と、金剛經のたくさん注釈書を持って出掛けた。途中、峠の茶店で点心を食べようとしたところ、出て来た老婆に「あなたが背負っているのは何か」と尋ねられたので「これは金剛經の立派な注釈書だ」と答えたところ、老婆は「その金剛經には確か『過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得』とあり、現在は過ぎ去ってしまおうとしているので現在の心は分からない。過去はもうないので過去の心も分からない。未来はまだないので未来の心も分からないと教えている。

⁴⁷ 内村鑑三：1861年～1930年。キリスト教思想家・文学者・伝道者・聖書学者。福音主義信仰と時事社会批判に基づく日本独自のいわゆる無教会主義を唱えた。『代表的日本人』の著者でもある。

⁴⁸ 正法眼蔵：日本曹洞宗の開祖である道元が、1231年から示寂する1253年まで生涯をかけて著した87巻に及ぶ大著であり、日本曹洞禅思想の神髄が説かれている。道元は、中国曹洞宗の如浄の法を継ぎ、さらに道元独自の思想深化発展がなされている。

⁴⁹ 徳山宣鑑：782年～865年。中国、唐代の禅僧。姓は周氏。初め律や唯識を学んだが、のちに禅を学び、その修行は、徳山の棒と称されるほど厳格であった。

ところでお坊さん、あなたは私があげる点心を現在心、過去心、未来心のどの心で点じようとなさるのか」と言ったのである。それに徳山は一言も答えられなかったので、書物の学だけではないということから「いい得るも三十棒、いい得ざるも三十棒」というあの禅の名匠徳山になったと言われる。

これに関して『正法眼蔵』にはどうしたらよいかと書いてあるが、「今しかない」という問いに対して、道元の言い方では「而今(にこん)」となる。「而今」とは過去と未来を現在の中に折りたたむような考え方で、ラテン語で「hic et nunc(今ここ)」という「今」である。これはベルクソンで言うならば「持続を生きる」ということに当たっていて、数学的、時計的な刻まれる時間ではなく、過去の記憶をも今に入れつつ、未来への期待をも今に含みながら「今こししかない」というところで本当の時間が出てくるという考えである。

Q9 ベルクソン哲学を学ぶための入門編はないか

見えない世界や唯心論は西洋の哲学にはないと思っていて、ベルクソンのことも初めて知った。唯物論では世の中は上手くいかない、良い世界にはならないということなので、見えない世界のことを少しは人に話したいと思うが、それに関しては仏教や神道や日本的なものしか説得する材料がないと思っていた。日本人は西洋的な話は聞いてくれるところがあり、ヨーロッパにも神秘学のルドルフ・シュタイナー⁵⁰のような人がいるが、難しくて説明できない。そういう中で、現代の人に説明するのにベルクソンは素晴らしいと思うので、我々も分かるような入門書のようなものがあれば教えていただきたい。

(瀧)

それが、実は難しい。簡単な新書版や薄手の「すぐに分かる」とか「3分で分かる」というような本が出ているが、それは3分で分かるだけの分かり方だし、100ページで分かるだけの分かり方である。よく言われるように、人文学の一番良い入門書はその道の古典を読むことなので、ベルクソンであれば、薄いけれどもベルクソンそのものが生き生きと躍動している『形而上学入門』(哲学入門)をお薦めしたい。30ページもない本なので、できれば英訳で読んだ方が分かりやすい。

西田幾多郎はベルクソンの『形而上学入門』を読んで「初めてベルクソンの骨が分かった」と言っているし、九鬼周造も「私は哲学というものが全く分からない人にこの『形而上学入門』を薦めたい」と絶賛している。私自身も『形而上学入門』は、「分析」と「直観」との違いから入るので、他のどのような概説や解説書を読むよりも良いと思う。原題は『L'Introduction à la Métaphysique』(An Introduction to Metaphysics)である。これは入門編だが、本当に哲学とはどういうものか、たくさんの具体的なイメージとして思い浮かべ

⁵⁰ ルドルフ・シュタイナー：1861年～1925年。オーストリアやドイツで活動した神秘思想家、哲学者、教育者。神智学協会に属していたが、後に離脱し人智学協会を設立し、世界中に組織を広めた。「自由・平等・友愛」という普遍のテーマを掲げながら、自然科学的思考法と精神的直観の統合を追求し続けた。

られる、文学的な美しい文章からなっているので、これをお薦めしたい。いろいろな翻訳が出ているので、翻訳で読んでも結構だと思う。

「今を生きよ」。

そして、人間として、人類として「善く」、「美しく」生きることを問え

次代を拓く君たちを祝福して、二つの言葉を贈りたいと思います。

第一の言葉は、「今を生きよ」です。これは古代ローマの詩人ホラティウスの「カルペ・ディエム(Carpe diem)」という言葉で、文字どおりには「その日〔の花〕を摘め」ということですが、「今を生きよ」と意識されます。「君の上に照る毎日毎日を最後の日と思いたまえ。そうすれば君の予期していなかった時間を君は感謝をもって受け取ることだろう。」とホラティウス(『書簡詩集』1. 4. 13-14)は言っています。君たちの生まれる前の古い日本映画を例に出しますと、黒澤明監督の『生きる』(1952)で、志村喬が演じた市役所の課長は、胃癌で先が長くないと知ったときから、高架下のぬかるんだ公園の治水工事のために、余命を捧げ、一生懸命に「生き」ました。あの姿が本当に「今を生きる」イメージを与えてくれます。公園が完成した晩、主人公は小雪舞うブランコに揺られながら有名な「ゴンドラの唄」をうたうのです。「命短し、恋せよ乙女 […] 明日という日はないものを。」19世紀のアメリカでは、ソロー(『ウォールデン《森で生きる》)もまた、「いよいよ死ぬときになって、自分は結局生きてはいなかったなどと思い知らされるのもご免だった。」と言っています。

鎌倉時代の道元禅師もまた『正法眼蔵』のなかで、「而今(にこん、しきん)」すなわち「今ここ」を生きることの大切さを説いています。hic et nunc(now-here)です。さて、古来「理想郷」として、西洋ではエデンの園、東洋では中国の桃源郷、日本の常世国、無何有郷、チベットのシャンバラなどが考えられてきましたが、それらは観念的(ideal)で非現実的(irreal)な「架空国」にすぎない、と思われるかもしれません。トマス・モアの言うとおり、「ユートピア」とは〈良いeu場所topos〉であって〈どこにもないou場所topos〉なのかもしれません。しかし、No-where(どこにもない)というけれども、ちょっとハイフンをズラせば、Now-here(いまここ)になります。No-whereはNow-hereだったので。徒に日々をやり過ごすのではなく、いつ死んでも悔いのないように、「一大事と申すは、今日ただ今の心なり」(正受老人こと道鏡慧端禅師)と覚悟して、生を生きぬきたいものです。

第二の言葉は、「里仁為美」です。これは『論語』の「里仁」篇にある言葉で、古来、いろいろ読みなされてきましたが、「仁に里(お)れば、美を為す」と訓じたいところです。

「仁」とは人偏に二と書くように、人が二人いるときの理想的状況としての「愛」(love, humanity)を意味します。また「美」とは「羊」が「大きい」と書きますが、「羊」は古代中国では、生贄として天に捧げる犠牲の子羊のことで、それが「大」であるとすれば、「美」とは最大の自己犠牲を意味するでしょう。キリスト教では、人類の罪を贖って磔の刑に服し

たイエス（エリ-エリ-レマ-サバクタニ わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか）を、また仏教では、谷底にいる飢えた虎どものために我が身を投じた釈迦（捨身飼虎 Vyaghri-Jataka 身を捨てて虎に食わせる）を考えてみれば、自己犠牲の美しさを思いみることができるでしょう。このように愛のために身も心も捧げて美に殉じることこそ「里仁為美」に他なりません。「心が愛に満ちていれば、おのずから美しい行為をなすことができる」というのが「里仁為美」の意味です。

自己犠牲ということでは、さらに「アンパンマン」を思い出してもらえれば良いかと思います。目の前にお腹を空かせた人がいると、アンパンマンは自分の顔（パン）をちぎって食べてもらうのです。このような自己犠牲の行為は、いつの時代でもどこの場所でも通用する立派な行為ですから、アンパンマンは愛と勇気を友とする正義の味方なのです。

「大切なのは、ただ生きるのではなく、善く生きることである。」とソクラテスは言いました（プラトン『クリトン』篇）。哲学とは「知を愛する」（*philo-sophia*）ことですが、その意味は、魂の世話をして、魂を卓越したものにする、つまり徳を身につけることです。動物のように体の世話だけをして「ただ生きる」のではなく、人間として魂の世話をして「善く生きる」ことが問題です。人間として「善く生きること」は結局のところ、人類の一員として「美しく生きること」に帰着するでしょう。我が身ひとりのことではなく、人類のこととして、全身全霊を投げうって世界の平和と人類の幸福のために命を燃やすこと、自分の好きな道に精進しながら、己を無にして世のため人のために尽くすこと、それが孔子（儒教）や釈迦（仏教）やイエス（キリスト教）の教えだと思います。

2025（令和 7）年 2 月 1 日制作

監 修 瀧 一郎

編集・制作 公益財団法人国際高等研究所
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)